
とよなか

Vol.31

令和3年度

研究紀要

大阪府立豊中支援学校

は じ め に

本校教育活動の総括として、研究紀要「とよなか vol. 31」を発行いたします。今年度の実践交流会における、研究授業や各教科研究会等のポスター発表を中心に本校の教育実践をまとめています。まだまだ先の見えない新型コロナウイルス感染症の流行の中で、少しずつではありますが以前のような教育活動や本校における「新しい生活様式」に則った教育活動を積み上げていくことで、日々の児童生徒の「できること」「わかること」が増え、新たな「もっとやってみたい」につながっているように感じています。教員一人ひとりが授業を大切にしていける姿勢を忘れず、それぞれ工夫してきた成果をご覧いただければ幸いです。

今年度で大阪府教育庁の学校経営推進費事業「豊中 安全安心 HOT ホット PROJECT」は3年目の取り組みとなり、いよいよ終了年度を迎えます。事業費で購入した物品の授業や学校行事における活用がますます広がり、日常の学校生活における防災教育の広がりや深まりが着実に進んでいます。プロジェクトは終了となりますが、これまでの実践を基礎として、本校の「日常から取り組む防災教育」を更に発展させていくとともに、より多くの情報を地域や大阪府内の各支援学校に発信していきたいと考えています。

まだまだ改善すべき点も多々ある本紀要ですが、少しでも他校の参考となれば幸いです。何卒ご高覧いただき、忌憚のないご意見を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、関係機関の皆さまには日ごろより温かなご支援、ご理解を賜り、心より感謝しております。これからも引き続き、ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

令和4年3月

大阪府立豊中支援学校長 平井 晋也

目次

はじめに

I 教科会、教科研からの実践報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P3
英語 職業 教材 国語 生活 算数・数学 自立活動 家庭 図工・美術	

※理科、保健・体育、社会、音楽、自閉症研究に関しては ポスター発表と兼ねているため、ポスターのみ掲載しております。
--

II 各学部のポスター発表

小学部 『プログラミング的思考を学ぼう』・・・・・・・・・・	P20
中学部 『防災学習に教科等横断的な学習への取り組み』・・・・・・・・	P22
高等部 『特別支援学校高等部における軽度知的障害を抱える生徒の ピア・メディエーションに関する実践』・・・・・・・・	P23

III 教科会、教科研のポスター発表

自閉症『太田ステージを使った自閉スペクトラム症児童生徒への支援』・・・・・・・・	P25
体育『忍者修行[中学部]』・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P28
理科『理科の授業紹介（「酸とアルカリ」の実験を通して）』・・・・・・・・	P29
音楽『子どもたちが主体的に表現に取り組める音楽指導とは ～1人1台端末（ipad）を活用した音楽授業づくり～』・・・・・・・・	P30
国語『意欲を高める国語授業の導入』・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P32
図工・美術『「子どもたちの賛歌」展ー42年のあゆみと心ときめく作品達ー』・・・	P34
ICT『ICT活用事例 ICTPTより愛をこめて』・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P36
豊中安全安心HOTホッとPROJECT・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P42

IV 安安事業 実践報告

安安事業 実践報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P43
-----------------------------	-----

V 教職員の授業研究

〈小学部〉国語科：学習指導案、研究協議記録・・・・・・・・・・	P45
〈中学部〉音楽家：学習指導案、研究協議記録・・・・・・・・・・	P55
〈高等部〉数学科：学習指導案、研究協議記録・・・・・・・・・・	P64

VI 豊中支援学校 キャリア教育6観点表・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あとがき

I 教科会、教科研からの実践報告

教科会 英語 実践報告 興味関心を育てる授業

中学部 高良祥也

1. 生徒観

中学部は2年前から外国語の授業が始まり、国際交流等のネイティブスピーカーとの授業経験もあり、「英語は楽しい」という感想を持っている生徒や聞きなれた英語の歌を口ずさんで踊ることができる生徒もいる。英語に関する興味・関心が高い生徒が多い。更に英語への興味関心を高める工夫をおこなっている。

2. 指導観

英語の5つの領域のうち「聞くこと」「話すこと（やりとり）」に焦点を当てている。令和元年度は色々な英語の歌を歌うことで英語を楽しみながら身に付けることができると考えていた。

昨年度から新型コロナウイルスの影響で歌を歌うことはせずに色々な英語のダンスに取り組むことで楽しみながら身に付けることを意識し、生徒全員が楽しく活動に取り組める集団づくりをしていきたい。【協-①】身近な物の英単語クイズを通して、教員とのやりとりを工夫する。【コ-②】ゲームの要素を取り入れ友だちと協力して答えられるようにし友だちとのコミュニケーションに繋がるように配慮している。【協-②】また、電子黒板を活用することで生徒が積極的に手を挙げて、電子黒板に答えを記入できるようにするなど生徒の主体性ができるような工夫する。【見-②】

豊中支援学校 キャリアの6観点

【協-①】協調する力① 集団に参加できる。

【コ-②】コミュニケーション力 ②自分の要求・意思を伝えることができる。

【協-②】協調する力②協力できる。

【見-②】見通し、行動できる力②見通しを立てて行動することができる。

3. まとめ

ICT 機器を使用することで生徒の興味関心を高めることができると感じた。また、意思表示ができるようにすることで「できた!」という自信にもつなげることができる。生徒からも「次の授業は何をするのですか?」という質問を多くなり、興味関心が高いことで次の学習への意欲につなげることができると感じた。

I 教科会、教科研からの実践報告

教科会 職業 実践報告 堀 則夫

1 各学部職業科の指導目標

(1) 中学部

多様な分野の作業および職業体験を通して働くことに関心を持つこと、友だちと協力して安全に作業に取り組むこと、準備や後片付けなども含めて最後までやりきることの3点を主な柱として、生徒の発達課題に合わせて目標を設定している。

(2) 高等部

ワーキングコースの選択授業である園芸クラフト・清掃・委託の3つの科目での基本的な技術、知識を身につけるとともに、集団活動に必要な協調性、マナーを身につけ、自主的な実践力、社会人として必要とされる継続する力・適応する力を養わせることを目標としている。

トライコースの作業では、作業能力の基礎を培い、総合的な力を身につける。卒業後の進路選択の幅を広げられるためのスキルアップを目標としている。

学習グループ ABC で実施している進路学習は将来の生活に係る技能・表現する力・実践的な態度を育むことを目標としている。

(3) 小学部

小学部では教科設定に職業での実施がない。

2 各学部の農作業を取り入れた教育活動

小学部では、主に「生活」の活動で栽培に取り組んでいる。サツマイモの栽培に取り組んだり、プランターでプチトマト・ホウレンソウなど野菜を育てたり、ひまわり・チューリップなどの花の栽培をしたりしている。苗や種の植え付けと収穫が主な活動であるが、当番を決めて児童が水遣りを行っている。

中学部では、主に職業科で野菜の栽培に取り組んでいる。植え付け（種まき）と収穫の間は、他の分野の学習を行いながら、適宜除草や灌水を授業中に行っている。収穫物は、生徒が家庭に持ち帰る。

高等部では、今年度からコース制が新しくなり、1年生は「職業」、2、3年生はワーキングコースの「園芸クラフト」で校外の畑で土作りから継続的に栽培に取り組んでいる。育てた野菜は生徒が持ち帰ったり、職員室前で無人販売を実施したりしている。「作業」では、校内の畑やプランター・花壇で、野菜や花の栽培をしている。

3 職業の科目で学ぶこと

(1) 素直な気持ち ～社会で仕事を教えられる人～

専門分野に興味をもち前向きに授業を受けて、辛い仕事や体力を使う仕事を進んで引き受ける素直な気持ちを育む。教員が自ら動いてお手本を見せることで、指示にしたがい前向きに作業をこつこつする。社会に出たときに「素直に仕事に取り組む」＝「仕事を教えられる人」＝「仕事を覚える人」＝「できる人」につながっていけるように学習する。

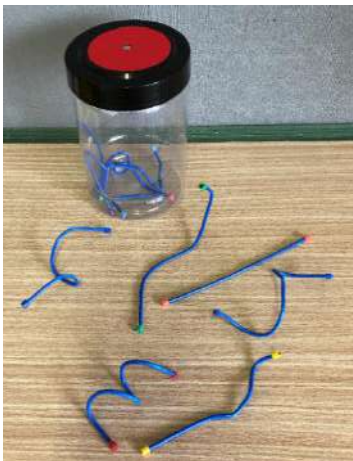
(2) 現場作業の雰囲気 ～実社会のような経験～

社会での経験が少ない生徒にとって、企業就労のような雰囲気で報告・連絡・相談のホウレンソウをすることができ、自立した気持ちで授業にのぞむ。

(3) 日常生活に活かす ～実践する～

授業で習得した知識や技能を（校内外の全ての）日常生活で実践し、生活を豊かにする。自己肯定感をはぐくみ、技術の習熟につながる。

教材研究では、夏休みに校内・校外の教員向けの教材作成の研修を行っている。この研修のテーマは、「身近な物を使った教材作り」で、“ペットボトルのキャップ”、“針金ハンガー”など、リサイクル品で教材作りを行っている。研修で実際に教材教具を作られた方は、対象の児童生徒の実態に合わせて、細かな工夫をして作っている。この研修を担当している教員の豊富な知識、多彩なアイディアで、いろいろな教材教具を作ることができて、非常に好評である。以下に、これまでに作成した教材の作成方法や工夫点を紹介する。

	『ボルトあわせ』 大きなネジの方がつまみやすく、回しやすいと感じ、大きめのネジを使用した。プラスチック板を同じ型に数枚カッターでカットし、やすりで切断面を整える。同じ型に切ることが困難であった。穴をあける際は、ドリルを使用した。 ねじの大きさや型を変えたり、色づけをして色のマッチングをしたり、実態に応じて難易度を変えられることが魅力的である。
	『ペットボトルキャップの積み重ね』 ペットボトルの飲み口部分を切り取る。キャップの内側にあるプラスチックの丸板を外し、切り口をやすりで整えて外した丸板をはめ込む。同様に飲み口の先にも丸板をはめ込む。飲み口の先にも色シールを貼り、キャップと色あわせをする。 写真カードを見ながら写真カードと同じように積み重ねる課題設定もできる。
	『針金ハンガーの穴通し』 針金ハンガーを適量の長さで切る。切りっぱなしのままでは危険なため、先端にビーズを付ける。針金の曲げ方を工夫することで、穴に通る向きと通らない向きを作ることができる。入れ物は針金が入る様子が見える透明のものがよい。本校では、味付け海苔の円柱の容器を使用した。蓋にカッティングシートを貼り、中心に5mm程の穴を開ける。 タイム計測をしてゲーム性を持たせて取り組むこともできる。

教科会 国語 実践報告 子どもの「聞く」力を育てる授業

小学部 中島陽子

1 はじめに

国語力とは「読む・聞く・話す・書く」力である。その中でも「聞く」力というのは、本校が重点的に取り組んでいるキャリア教育との関連において、「コミュニケーション力」の基本となる。そこで、今回は「聞く」力に焦点を絞って考えたい。

今年度担当する小学部4年生の児童の国語の授業において、子どもたちが主体的に楽しく「聞く」場面を設定することができたので、その工夫を以下に示す。

2 「お話クイズ」

授業グループは4年生の中でも、高い課題に取り組むグループで、9名の児童を3人の教員で担当している。一コマの授業時間は50分と長いので、私はいつも「導入の活動・メインの学習活動・個別のプリント学習」に分けて行う。「聞く」力を育てる活動は、毎回、導入として行い、授業への集中力を高め、メインの学習活動に至る前のウォーミングアップとなっている。お話クイズは以下の手順で展開する。

- ① クイズを出す
- ② 答えの選択肢を示す
- ③ 子どもたちが予想を立てる
- ④ お話を読む
- ⑤ 答えを確かめる

この展開の仕方は、いわゆる仮説実験授業のやりかたを参考にして組み立てている。お話は「かがくなぜどうして一年生」（偕成社）や「ざんねんないきもの事典」（高橋書店）などから子どもたちが興味を持ってそうな内容を毎回1つ選んで採用している。まず①で、「昼の間、星はどこにいますか？」という風に問いかける。子どもたちがイメージを持ちやすいように、本の挿絵を拡大したものを示す場合もある。②子どもたちから、答えらしき言葉が出る場合もあるが、出なかったとしても2択で「A 空の上」「B 土の中」という風に選択肢を示す。③子どもたちにはAかBのどちらかの答えを予想してもらう。その際、子どもの顔写真をそれぞれの予想の下に貼っていく。④「ではお話を読みます」と言って、そのクイズの答えが書かれている本文（200字程度の短文）を教員がゆっくりと読む。この時、子どもたちはいつもと違って、静かに答えがどこに出てくるか期待をもって聞いている。⑤お話の途中で答えが聞き取れる子もいるが、聞き逃している子もいるので、教員が「答えはAでしたね」と明言する。すると合っていた子どもは「やったー！」と笑顔を見せる。間違えることに敏感な子もいるので、答えを言う前に「間違ってもいいです。クイズだからね。」と念を押しておくことも、必要な配慮となる。

3 まとめ

聞きたい気持ちがあるからこそ、子どもは主体的に話を聞こうとする。お話クイズでは最初に問題を出し、子どもが予想立てていることが、話を聞きたくなる仕掛けとなっている。お話に書いてあったことが「わかった」「楽しかった」という経験が、また次の話も聞いてみたいという意欲につながっているように思う。

I 教科会、教科研からの実践報告

教科会 生活 実践報告

小学部 奥井 華代子

生活科は小学部の生活では、どのような点に児童の学習の目標をおいて授業を行っているのかということ、豊中支援学校でのキャリア教育の観点と照らし合わせて考える活動を行った。

1. 生活の「集団活動」での学習活動（一部）

1 年生	身近な教員や友だちに関心をもつ 教員や友だちと関わりながら、一緒に活動する
2 年生	遊びを通して教員や友だちと関わる経験を積む 簡単なきまりのある遊びをする
3 年生	教員や友だちと関わりながら、一緒に活動する 簡単なルールのある遊びをする
4 年生	教員や友だちを意識し、相手に合わせながら活動する 順番や簡単なルールを守って行動する
5 年生	教員や友だちを意識し、教員や友だちに働きかけたり、相手に合わしたりしながら行動する 友だちと一緒にごっこ遊びやルールのあるゲームをする
6 年生	集団の中で遊んで活動し、友だちや教員との関係を広げる 友だちと一緒にルールのあるゲームをする

2. 生活の授業の指導略案に挙げられているキャリア教育の観点

低学年：身近な大人に関わることができる【コミュニケーション力】など

中学年：友だちと一緒に活動することができる【コミュニケーション力】

集団に参加できる【協調する力】など

高学年：順番を守ることができる【ルール理解・遵守力】など

3. まとめ

低学年では身近な教員や友だちと関わることから集団活動の学習をはじめ、中学年では友だちを意識して簡単なルールを守っての活動、高学年では集団の中で友だちに働きかけ、関係を広げていけるような学習活動を設定するようにしている。キャリア教育の観点でも低学年では身近な人と関わる【コミュニケーション力】、中学年になると【協調する力】という点が入り、高学年では【ルール理解・遵守力】という点も多く入る。自分だけでなく相手も意識した行動ができるようなキャリア教育の目標が設定されることとなっている。

教科会 算数 小学部 教材教具紹介

小学部：鈴木康太、谷口和、森岡恵、吉野あゆむ

「かたち」の学習についての4事例を紹介します。「かたち」を知ることによって身の回りにある（文字も含めた）記号に気がつき、興味を持つこと【ルール理解・遵守力】で生活が豊かになることにつながると考えています。また、対象物を注視して操作する経験を積むことで、指示を聞いて話を理解すること【コミュニケーション】にもつながっていくと考えています。



【対象者】低学年1段階	【対象者】中学年1段階
【教材名】形と色分け課題（○・△・□）	【教材名】形・色・大小弁別の課題
【使い方】 ・○・△・□を赤・黄・青の色ごとに分ける。 ・赤・黄・青を○・△・□の形ごとに分ける。	【使い方】 児童の実態や学習の深まりに応じて、課題を変えて取り組めるようにする。 ○課題の提示方法を変える。 ・見本を提示し、マッチングで課題に取り組めるようにする。 ・口頭指示を聞いて課題に取り組めるようにする。 ○課題の内容をスモールステップで変える。 ・形（○・△・□）のみの弁別 ・色（赤・黄・青）のみの弁別 ・形と色のクロス課題 ・大小のみの弁別 ・形と大小のクロス課題
【ねらい】 ・基礎的な三色と形のマッチングができる。 ・形と色の課題を連続で行うことで、課題の切り替えに慣れる。	【ねらい】 ・低学年での取り組みを発展させ、大小の弁別やクロス課題に対する理解を深める。

	【教材名】リサイクルボックス～資源ごみの分別～ ※算数・生活の合科教材 【使い方】 - イラストの表示に従って、資源ごみを分別する。 〈例〉同じ「びん」でも、形状の違うものも用意し、児童に合わせて難易度を変える。 - イラストでの分別が難しい児童には、写真カードを提示する。 【ねらい】 - ごみはごみ箱に捨てる意識を育てる。 - 表示に従ってごみを分けて捨てることを知る。 - 資源ごみのカテゴリー化ができる。 - 資源ごみを投入口の形に合わせて入れることができる。 - この学習を将来、社会生活を送るうえでのマナーとして身に付け、さらにごみの削減、資源のリサイクルにつなげる。
	【教材名】○・△・□を探そう 【使い方】 - 身の回りにあるものの形に注目して、丸、三角、四角を探し、見つける。 - 形の違いが判り、図形を描くことができる。 【ねらい】 - 形（丸、三角、四角）の名称と特徴の確認。実際に物に触れて、形について考える。 - 絵や写真の中から、丸、三角、四角を探す。見つけた形の特徴を確認しながら、図形ごとに分類する。 - 教室や校内など、身の回りにあるものから、丸、三角、四角を探す。

教科研 自立活動 実践報告

小学部 恒川仁美

自立活動教科研では、気軽に実践を紹介しあい、教材を実際に触れることで、実態把握に大切な視点や子どもの課題背景を学び、障がい理解を深めて子どもに関わる楽しさを再確認している。

夏には動作法の公開研修を行い、校内はもちろん校外からも多数の参加があった。感染防止に配慮をしながらも、実態把握の方法や関わり方を体験しながら学ぶことのできる貴重な研修となった。

1 今年度の主な取り組み

(1) 実践発表



①Quizizz (クイズアプリ)

社会の授業でタブレットを各自で使用し、Quizizz というアプリを使って楽しみながら友だちと一緒に近畿地方の名産や名所を覚える取り組みである。写真で名所や名産がでてくるので覚えやすく、子どもたちは毎回授業を楽しみにして取り組んでいる。今回は教員も実際に体験し、4択で正解を選び班で正誤率を競い合った。

②高等部の実践より ～チャスチャス・エナジーチャイム・コンガを使って～

インドの曲に合わせて、チャスチャス、エナジーチャイム、コンガを生徒が自由に演奏する取り組みだった。回を重ねるにしたがって好きな楽器を選んだり、自分でタイミングを考えて演奏をしたりするようになった。また一緒に演奏したい友だちを自分から誘う姿も見られるようになり、友だち同士のやりとりも増えてきた。

どの実践発表も実際に教員が体験することで、楽しみながら学ぶことができた。



(2) 夏季研修会「動作法」

①日程、参加者

7月29日「リラクゼーション講座」～肩の動き、軀幹ひねり等～

7月30日「コミュニケーション講座①」 ～腕上げ動作コントロール等～

8月2日「コミュニケーション講座②」 共同注意、三項関係の成立をめざして

8月3日「タテ系講座」～あぐら座、膝立ち、立位等～

外部からの参加も含めて4日間で延べ74名の参加があった。

I 教科会、教科研からの実践報告

② アンケートより

- ・実技がたくさんあり、実際に身体を動かして体感でき、とても貴重な体験ができた。
- ・初めて支援学校に配属され、支援の方法が分からなかったので受講した。
- ・相手が安心して身を任せられるような触れ方、接し方を学んだ。交代してやることで、どうすれば安心できるかわかりやすかった。ほんの小さな動作に大切なことがつまっていることが分かった。

③ 「動作法」について

人は生活の中の様々な場面で、様々な人と関わり、色々なやり取りすることにより、相手の意図を理解して、自分の思いを発信しながら、よりよく生きていこうとしている。

その過程で「自分の在り方を」を見つめ直し、周囲の人の力も借りながら、自分をコントロールする力を身につけていく。そして少しずつ今の自分に修正を加えながら成長していく。

「動作法」はまさにこのことを実践している。

「動作法」は言葉や文字を使わず、その人の意図や努力が反映された「動作」を使っている。

これまで多くの実践者や研究者によってたくさんの技法が開発されているが、その「型」ととられ過ぎずに、「動作」を使って相手とやり取りする過程で教師自身が自己を研鑽し、相手の成長を願う教育の「本質」を大切にしていければと思う。

すべての支援に言えることだが、形やパターンの実践にとどまらず、目の前の事柄に対してどのように「意味づけ」、「価値づけ」、「方向づけ」していくのか？ このことを支援者として常に深く考え続けられることが大切である。

その「指導」や「支援」は何のためにやっているのか？ そこが明確になればなるほど、「動作法」を含むすべての教育活動がより有効になってくる。今回の夏季研修会では多くの先生方がこのことについて考えを深め、実践できていたのではないかと感じた。

研修担当 首席 小西厚

2 今年度に購入した教材の紹介

ハートフリークッション、Movin Sit、こころカルタ



骨盤を立てたまま
保持しやすい。



研修会でOTから
紹介があった。



こころかるたは、お互いを理解し関係性を深める
楽しみを味わうカード遊びです。(紹介文より)

教科会 家庭科 実践報告

オリジナルトートバッグ制作—生徒の自己選択・自己決定を大切に—

家庭科 高等部 西原 清子

本校では、中学部、高等部の「家庭」や小学部の「生活」の授業でさをり織りの授業を取り入れている。さをりの授業では、外部講師に來校いただき、授業担当者と共に指導をしていただいている。

高等部3年は4グループ展開で授業を行っている。グループにより、さをり織りの授業を行った学年、時間数が異なっている。グループにより時間数は異なり、計8～15時間のさをり織りの授業を行い、3年ではすべてのグループがさをり織りを行い、1学期中にさをり織りの授業を終えた。

授業で織った布は各グループ2年間分ある。生徒が織ったさをりの布は自分が選択した織り機により幅が異なっている。織るスピードも個人差があるため、布の長さは異なっている。また、今年度から家庭の授業時間が週1時間となったため、比較的短時間で制作できるものが良いと考え、一人ひとり幅や長さの異なるさをりの布を活かしかつ卒業後も使用できるトートバッグを制作することにした。その際、教員主導ではなく、生徒が自己選択、自己決定する力を少しでも育むことができるように自ら布の模様の選択、さをりの布の使用法を行い、「世界に一つしかない」オリジナルのトートバッグを制作することとした。

〔トートバッグ制作の目的〕※【】内は豊中支援学校のキャリア教育の6観点とその内容に基づく。

- ・自分の要求・意思、意見を伝えることができる【コー②、③】
- ・自分が行っている作業について報告、連絡ができる【コー④】
- ・道具を正しく使うことができる【ルー⑪】
- ・安全に配慮しながら、作業に集中して取り組むことができる【役一⑤】
- ・縫う手順を確認し、見通しをもって作業に取り組むことができる【見一②】
- ・布の模様を自ら選び、黒い布にさをりの布をどのように配置するかを自ら考え、選択、決定することができる【見一③】

〔指導について〕

＜教材＞「家庭」授業担当2名でさをりの布を使った作品を制作するかを考え、教材カタログの中から「全員完成リバーシブルトートバッグ」（布2枚、持ち手のひも1本）の業者から見本を取り寄せて確認し、本教材を使用することとした（図1）。

2枚の布は、1枚は模様のある布、もう1枚は無地の黒色の布である。

模様のある布は見本の中から選択可能である。ひもは半分に切って使用する。

＜指導方法＞

1. 生徒に、さをりの布を使用した作品制作を行うことを伝えた。実際に使用する教材の見本を見せ、教材の内容やリバーシブルトートバッグの実物を生徒に提示した。黒い布に自分が織ったさをりの布を縫い付けて、模様の側とさをりの布を用いた側のどちらを表にしても使用できる、オリジナルリバーシブルトートバッグを製作することを伝えた。使用する2枚の布について、以下のことを伝えた。

- ・模様のある布：数種類の布見本から自分の好きな模様を選ぶこと。
- ・無地の黒い布：自分たちが織ったさをりの布をどのように配置するか考えること。

まず、模様のある布を選択するよう生徒に伝え、布の模様について見本を提示し選択させた（1時間）。

2. 教材の注文後、再度、リバーシブルトートバッグについて説明し、黒い布の上にさをりの布を配置することを説明した。自分たちがさをりの布をどう使うかイメージを持つため、自分が織ったさをりの布を渡し、トートバッグ本体の生地に見立てた型紙を用意し、その上に配置を考えさせた（図2）（1時間）。使用するさをりの布には裏にアイロンで接着芯を貼った（図3）。この作業を行うことで、布に強度を与え、さをりの布をどこで裁断しても糸がほつれにくくなるようにした。



図1 教材

I 教科会、教科研からの実践報告



図2 型紙の上に布を置いてイメージする



図3 さをりの布に接着芯を貼る

3. 教材が届いた後、生徒は黒い布の上にさをりの布を配置して考えた（2時間）。

（1）1時間目は布を裁断せず、配置させた（図4）。布はそのまま配置したり、裁断を考えている場合は布を折るなどして配置させた。布の配置は写真に撮り、記録した。



図4 黒い布の上にさをりの布を配置する（一例）

（2）2時間目は1時間目に撮った写真を見て、再度どのように布を配置するか考えさせた。布を裁断する場合は教員に伝えてから裁ちばさみを用い裁断した。さをりの布の配置を決定した後、写真を撮り、記録した。この際、教員は生徒から相談された場合のみ助言を行い、できるだけ生徒が自分で考えるよう促した。Dグループについては、どこにさをりの布を配置するか教員と一緒に考えた。黒い布にさをりの布を縫いつける作業について、Aグループ以外のグループについては後の作業工程のことを考え、教員が行った。

〔まとめ〕

模様の布見本を見て選択する際、生徒がどの模様を選択するか迷い時間がかかることも想定していたが、ほとんどの生徒が見本を見て、あまり迷うことなく短時間で選択することができた。

さをりの布の配置の決定については、教材が届いてから2時間配置を考える時間を取った。1時間目の記録を写真で撮っておくことで、2時間目にそれを見て、1枚の布をそのまま使用したり、布を裁断する場所を決めてさをりの布を裁ちばさみで裁断して配置するなど、自分で工夫するなどして配置することができた。布の裁断や配置についてどうしたらよいか、友達の布の配置を見たり、友達や教員に相談する生徒もいたが、最終的には自分で決めることができた（図5）。



図5 生徒が考えたさをりの布の配置（一部）

ここではごく一部しか紹介できないが、それぞれが個性的な布の配置を行った。自分でさをりの布の配置を考えてそれを形にすることで、完成を楽しみにし、次の作業工程を早く行いたいという意思を示す姿が見られた。作業工程においても説明をよく聞き、ミシン縫いやアイロンがけの作業を行う順番を決める際に積極性が見られるなど、見通しを持ち、意欲的かつ集中して作業に取り組んでいた。

授業において教員が主導して物事を進めがちであるが、その中で生徒が自分の意思で物事を選択し、決定していく力を育むことは大切なことである。今回のトートバッグ制作では、導入部分で生徒が自己選択、自己決定を行うことにより、通常の授業より自ら意欲的に物事に取り組む姿勢を育むことができたのではないかと考える。オリジナルトートバッグが完成した際の生徒の反応が楽しみである。

I 教科会、教科研からの実践報告

教科会 図工・美術 実践報告

『子どもたちの讃歌』展 ―42年のあゆみと心ときめく作品達―

図工・美術科教科会 田中一恵

2020、2021年度と、新型コロナウイルス感染症の流行のため、中止となっているが、毎年、夏休み期間に『子どもたちの讃歌』展が行なわれている。その始まりは、42年前の本校からということで実践報告とさせていただく。

『子どもたちの讃歌』の展覧会名称に込められた「さんか」には、障がいのある子どもたちの素晴らしい作品を讃える「讃歌」と子どもたちが作品を通して社会に「参加」という意味がこめられている。42年前と現在、子供たちを取り巻く状況は時代とともに変化しているが、ユニバーサル化が進み、豊かな社会が、当たり前のことになる社会が望まれる。

1. 伝えたい

今から40年前の1979年、大阪府立豊中養護学校（現・豊中支援学校）の美術教員たちが一枚の生徒作品に心を動かされた。（下の作品）

現在では障がいのある人々の作品が高く評価され、作家の作品として美術館で展示されたり、作品がグッズにされてミュージアムショップに並んだりすることも、当たり前のことになっているが、当時は養護学校に通う児童生徒の作品が世に出ることは、まずなかった。しかし、教員たちは、

「障がいがある子どもたちは、世間でいわれているような、かわいそうな子どもたちではない、すごい力を持っている。このすばらしい絵をもっとたくさんの人々に見せたい！」
そうして、豊中市の画廊で養護学校に通う児童・生徒の作品展覧会「子どもたちの讃歌」が始まったのである。



題名 【 動くゆび 】

I 教科会、教科研からの実践報告

2. 研究会誕生

大阪府下の他の養護学校への呼びかけが始まり、障がいのある子どもたちに対する造形教育の情報交換や展覧会に向けての話し合いがもたれ、養護学校の美術教育に携わる教員の任意団体「大阪特別支援教育諸学校造形教育研究会」が誕生した。

このようにしてスタートした「子どもたちの讃歌」展は、いろいろな障がいのある児童・生徒の作品を展示し続けてきた。展示する作品はアートとしてすぐれたものやおもしろいものを選ぶこと、個人の名前をきちんと表示してアーティストとして扱うこと（本人・保護者の了解のうえ）、バザーなどと一緒にせず純粋にアートの展示として独立していること、助成金や児童・生徒の作品ポストカード販売などで運営すること、卒業生アーティストや、海外の障がい児の交流作品展示、アート指導に力をいれている作業所などの作品紹介など幅広く行なうこと、等々展覧会としての「こだわり」もあった。

3. 『子どもたちの讃歌』展のあゆみ

はじめのころは参加校も少なく、大阪駅前第2ビル内のアートプラザという狭い画廊で前半・後半にわかれて展示し、ポスターもシルクスクリーンの教員の手刷りであった。次第に参加校も増え、その後大阪府立現代美術センター（中の島・住友ビル内）を貸り、行なうようになった。



第1回ポスター

第20回展では、当時の横山ノック知事のテープカットで開会、記念のワークショップや講演も行なった。第21回（2000年）からは谷町4丁目に現美センターが移転し、第30回の節目の年には記念展示として初めて大立体のテーマ展示（大阪名物）を行なった。



第30回展の様子

第40回展は、本校が会長校として大阪市立美術館で行なわれ、4000人を超す来場者を迎えることができた。



第40回展の様子



I 教科会、教科研からの実践報告

《子どもたちの讃歌 年表》

年	回数	場所	参加校数	備考
1979		ときわ画廊	1 校	作品展開催の準備がスタートする。
1980	第 1 回	マルビルギャラリー	6 校	府立知的校が参加。 手刷りポスター作成。
1981	第 2 回	大阪駅前第2ビル アートプラザ	10 校	大阪市立校参加。
1982	第 3 回	アートプラザ	12 校	
1989	第 10 回	アートプラザ	17 校	10 周年記念誌発行・座談会 作品数 550 点
1994	第 15 回	大阪府立 現代美術センター (中の島)	18 校	大作展示 交流作品展示 タイ・アフリカの障がい児作品
1999	第 20 回		26 校	・パネルセッション ・映画会 ・ワークショップ
2009	第 30 回	大阪府立 現代美術センター (谷町4)	29 校	・立体テーマ(大阪名物)の展示 来場者2000人
2012 2013	第 33 回 第 34 回	湾岸ギャラリー CASO	29 校	全館利用 ・ワークショップ (変化する作品)
2014 2017	第 35 回 第 38 回	大阪市立美術館	37 校 42 校	第1 展覧会室
2018 2019 2020 2021	第 39 回 第 40 回 第 41 回 第 42 回	大阪市立美術館 ※ ※	42 校 46 校	第1・2 展覧会室 40 回展 来場者4000人 作品数4000点

※ 新型コロナウイルス感染症流行のため、中止。

2020 年は、展覧会に代えて、42 校による教材作品集を作成。

I 教科会、教科研からの実践報告

4、『子どもたちの讃歌』展の運営について

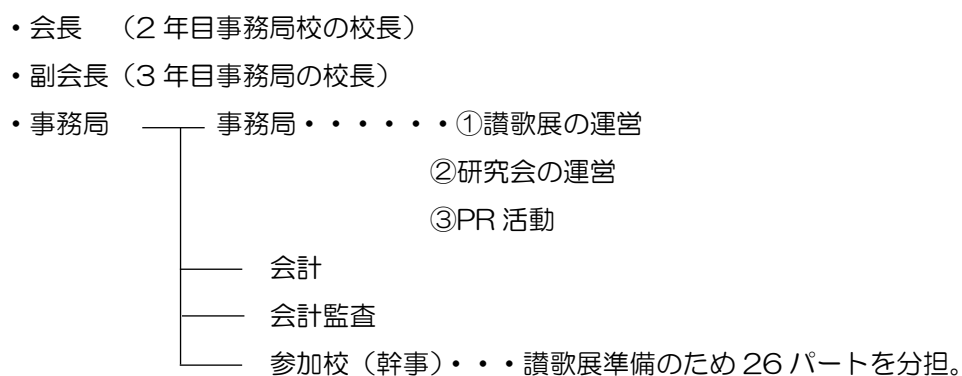
支援学校の美術教育に携わる教員の任意団体「大阪特別支援教育諸学校造形教育研究会」によって運営されている。

2019 年度の活動内容は

- | | |
|------------|---|
| ①総会 | 4 月 総会 |
| ②子どもたちの讃歌展 | 6 月・7 月 讃歌展打ち合わせ会で準備
8 月 讃歌展 搬入・開催・搬出
9 月 讃歌展 反省会・まとめ |
| ③研究会 | 2・3 学期各 1 回実施 |
| ④外部作品展出品 | 「共に生きる障がい者展」「全国展」等 |
| ⑤事務局引継ぎ | 新旧事務局校で3月中に実施 |
- 事務局（3 校）が中心となって運営。

（2020、2021 年度は新型コロナウイルス感染症流行のため例年と異なる活動となっている。）

【研究会組織図】（現在のもの）



（1）展覧会会期中について

① 搬入

- ・トラック 6 コースで各校巡回し、作品回収後、美術館に搬入。
- ・各校幹事と美術科教員とで展示作業
（約 250 名ほど参加）



搬入の様子

I 教科会、教科研からの実践報告

② 展覧会の構成

- ・ポスター・ピラ等に選出された選抜作品展示
- ・テーマ展示（平面）
- ・各校の展示（平面・小立体・大立体）
- ・ワークショップ
- ・OB 招待作品展示
- ・物販



③ 会期中の来場者(2019年度)

インバウンドにより多国籍の方の入場が増えてきており、展覧会の説明や子どもたちの作品についての説明を求められることも珍しくなってきた。(2019年度より英語、中国語の案内文を受け付けに配置した。)

海外の方にも作品を鑑賞してもらうことで、国内にとどまらず広く作品たちが羽ばたいていくことを喜ばしく感じる。

曜日	火	水	木	金	土	日	合計
来場者数 (人)	361	457	500	517	874	1433	4142

④ 合評会の実施・・・教員相互の研鑽に努めるために。

『合評会形式』

- ・各校数点「作品説明」を作成し、展示作品と共に掲示する
- ・当日は事前観覧をする。
- ・合評会は展示ブロックごとに行う。

(各ブロック5～10分程度、13ブロック)

※各校の展示スペースの前に各校の担当者が立ち、そのブロック以外の教員が質問・交流を行う。

- ・後半は「交流時間」とし、個別に質問・交流を行う。



合評会の様子

作品名	くるくる版画	材料
技法	回転版画	・スチレンボード ・油性ペン ・ペットボトルのふた（型をつけるもの） ・版画用絵の具 ・画用紙
スチレンボードに油性ペンで描くと、少し溶けて版ができます。ペットボトルのふたを押し付けて、模様をつけたりもしました。絵の具を1色ずつ刷り、版を回転させることで、3色の重なりを楽しみました。		

作品説明の例

I 教科会、教科研からの実践報告

⑤ 搬出

- ・美術館にて梱包作業。
搬出後、トラック 6 コースで各校巡回し作品返却。
- ・各校幹事と美術科教員とで撤収作業（約 250 名ほどの参加）

搬出の様子



- ⑥ 9 月に反省会を行ない、次年度への引継ぎ事項を確認する。

4. 研究会の活動

- ①子どもたちの讃歌展実施（4 月より 8 月上旬にかけて 5 回程度の会議、参加校が 23 パートの役割を担当し準備を進める。会期中の運営など）
- ②研究活動 2,3 学期に各 1 回、各校を巡回し校内案内、授業見学、ワークショップなどを実施
- ③PR 活動として 教育委員会主催展示会出品、てんかんアート展、スペシャルオリンピックス展示、日本教育美術連盟など研究会講演、実践発表、ポスターセッションなどへの参加

5. 研究活動の様子

4-②の定例の研究会は造形教育の情報交換の場であり、同じ校種でも子どもたちの個性や障がいの状況によって工夫されている点の違いもあり、指導方法や自校の教育活動の振りかえりを行うことができている。

アイデア収集の機会となり、制作の悩みを相談できるワークショップでは、課題に向き合い、和やかに瞳を輝かせ基本である造形教育の楽しさを享受している。

2019 年度の 3 学期は①紙コップを使ったクラッカー、②ステンドグラス風モビールの制作を行なった。

6. 児童生徒にとっての展覧会

展覧会は、授業で作られた作品が、いつもとは違う大きな美術館に展示されているという体験をすることによって、心地よい刺激や驚きがあり、美術館で見ただけの機会を活用し、生（なま）の感動を受け、他者から褒められることで自己実現でき、誇らしい体験の場となるのである。また、自分の作品を発表したい、見てもらうためにも頑張る制作したいなど意欲が高まることもある。

鑑賞後は作者に感動や感想を伝え、また誇らしい気持ちを共感していただきたい。

コロナ禍でここ 2 年、展覧会が中止となってしまったが、再開されることを強く願う。

プログラミング的思考を学ぼう



小学部3年

吉野あゆむ 清水恒星

子どもの実態



登校後、1日の予定カードを自分で確認する。

他の児童に注目することが難しい。

給食の用意をする前に遊び始める。

授業中によく離席してしまう。

プログラミング的思考とは

くすぐり遊びを通して担任との関りを楽しむ。

目的を達成するために物事を順序立てて考え、結論を導きだしていき、それを計画的に実行する考え方。

プログラミング的思考を身につけるということは

- ① 自分が動かせるものにいろいろなものがあることに気づく。
- ② 自分が命令することで、その命令通り動かせるものがあることに気づく。
- ③ ゴールをめざすためにどういう命令を出せばいいかを考え実行する。

本単元でめざしたキャリア教育の観点

「考え実行する」ということは、多くのことにつながる大切なことである。

・見通し、行動する力における目標設定力

様々な情報から必要なものを得ることができる（見―②）

見通しを立てて行動することができる（見―②）

・協調する力における対人スキル

他者の要求に適切に応じたり、拒否したりすることができる（協―⑤）

考え実行する
力はこれらの
基礎

「プログラミングロボット」を使うことにより、

・ルール理解・遵守力における日常生活スキル

道具を正しく使うことができる（ルー⑪）

この獲得にも
つながる

Ⅱ 各学部のポスター発表

指導内容

	小单元名	主な学習活動・内容	指導上の留意点
6月	・コード A ピラーで遊ぼう	・コード A ピラーに興味をもたせるため、教員による実演。 ・順番に触る。	・興味を引くために音が鳴るパーツを多めにつなげ、注目を集める。
7月	・コード A ピラーに指示をだそう	・直進・右折・左折を意識させる。	・直進・右折・左折を分かりやすく矢印で示す。明確に矢印と口頭で児童に伝えながら指示を出す。
11月	・ロボットで遊ぼう	・コード A ピラー以外のロボットでも遊ぶ。	・TRUETRUE の多種類の機能を使い、興味を持たせる。
12月～	・ロボットでゴールめざそう	・ゴールをめざす。	・右折・左折をタブレット端末のアプリを使用し学習する。ゴールにたどり着く成功体験を積み重ねる。

実践

コード A ピラー



前・左・右・前の指示をつなげたよ。

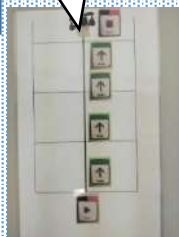


TRUETRUE

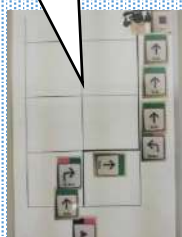


カードで指示をだすよ。右左は一人一台 iPad を使用して学習を積み重ねたよ。

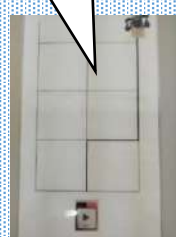
最初は直進のみ。



右左を加えました。



指示のカード無し。



最後の課題。障害物をよける道を考え、実行しよう。



正しくゴールすれば、僕が飛び出すよ。

成果

授業に集中（離席の激減）するようになった。

右・左の理解ができるようになった。

給食の用意をしてから遊ぶことができる日が増えつつある。

他の児童が取り組んでいる様子を見ることができるようになった。

順序立てて考え、実行し、ゴールをめざすことができた。

今後の課題

授業への動機づけが高まるような教材の工夫が必要。今後はプログラミングドローンに挑戦!?

防災学習における教科等横断的な学習への取組み

中学部 星 理子



防災学習 3つのS
 safety
 survival
 save yourself



評価方法
 防災グッズの体験発表
 新聞づくり
 /プロジェクト学習



防災マップ/学校周辺
 校外学習/あべのタスカル
 考える防災教室/大阪ガス
 火災避難・避難訓練/校内



防災グッズ体験(簡易トイレ・手回しラジオ・紙食器づくり)・ライフラインについて・学校の防災対策・日本の自然災害/理科社会 1・2
 天気図・気象警報について/道徳
 防災グッズ体験発表・防災グッズを選ぼう/自立活動
 防災マップ紙食器製作&体験/徒歩
 非常食について/家庭1・2
 新聞づくり/総合的な学習の時間

キャリアの観点

コ—⑧ 協—②
 役—③⑤ 見—①②

※参照 キャリア教育 6 観点

概要

国の地震調査委員会の研究によると、南海トラフ巨大地震が今後 30 年で起きる確率が70～80%とされている。

中学部 2 年生では、「災害の危険を知るとともに、日常の防災に対する備えについて考える」という目標を設定し、総合的な学習の時間と各教科等と関連させ、探究的な学習活動の充実を図った。



特別支援学校高等部における軽度知的障がいを抱える生徒のピア・メディエーションに関する実践

大阪府立豊中支援学校・高等部 森本 晃介

問題と目的

生徒間で理解を深め互いに支えあうことができる集団作りを目指している。市川・森本・井澤(2021)ポジティブ道徳カード法を用いての実践を行った。生徒からは「他の生徒と話しやすくなった」、「楽しかった」等のポジティブな回答が見られた。その中で生徒から「もめ事が怖い」、「対立したらどうしよう」という意見が生徒から上がった。対立を建設的にとらえ、自分たちで対立を解消し、より主体的に行動できる集団づくりをめざし、ピア・メディエーション(対立の仲裁)の実践を行った。

方法

大阪府立豊中支援学校高等部3年生、軽度知的障がいのクラス9名を対象とした。

実践の検証として個人面談を実践開始前と実践終了後に行った。実践前後で生徒の対立解消への意識変化について考察することにした。

池島・竹内(2011)による指導用ビデオ・指導案や有門(2012)を参考にした。資料1にあるように計8回の計画を立て実践を行った。

資料1 ピア・メディエーションの実践計画

時間	テーマ	ねらい
1	怒りの感情を知ろう	怒りのメカニズムを理解し、自分と他者の怒り方には差異があることを知る。
2	すてきな聴き方	他者の話を適切に聴く方法を身につける。
3	すてきな頼み方	適切な頼み方を身につける。
4	納得のいく断り方	適切な断り方を身につける。
5	実践1「悪口を言った、言わない」	日常生活の中で対立が生じて主体的に対話を重ね解決しようとする姿勢を養う。
6	実践2「そうじをサボった!？」	
7	実践3「わざとぶつかった!？」	
8	実践4「手が出ているケンカ」	

実践の概要

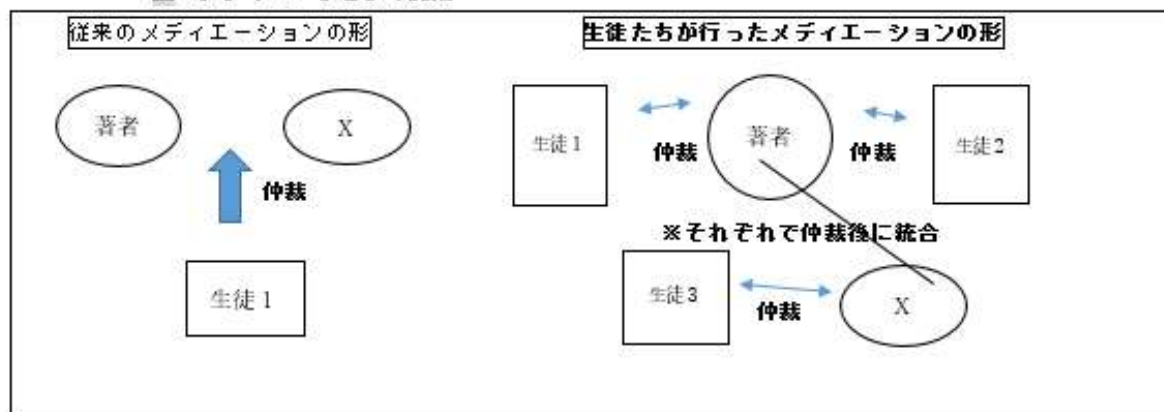
1時間目は怒りのメカニズムを理解し、自分と他者の怒り方には差異があることを学んだ。生徒からは「他の人と自分の怒りの沸点が違う」、「怒りが異なるから対立が生まれるのかな」といった意見が出た。

2～4時間目では、3人組のグループ(×3班)で実践を行った。就労を意識したクラスなので、「就労後の姿」を意識しながらコミュニケーションに関するロールプレイを行った。

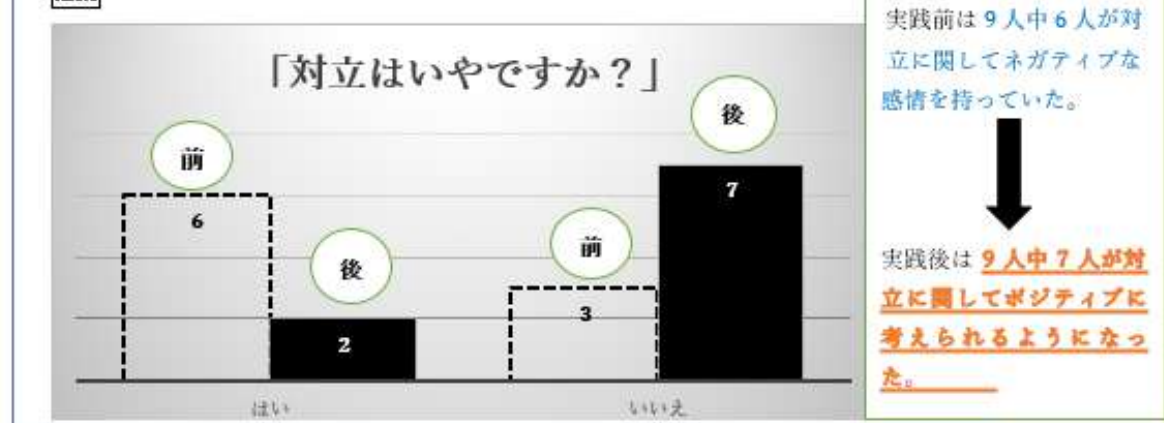
5～8時間目では、グループによるメディエーションを行った。著者と教員Xがけんかをしているという設定にした。図にあるように、生徒たちは著者とXをその場から引き離し、状況に応じて(例えば著者の方がイライラしていると判断すれば)著者の方に2名の生徒が対応し、Xは1名の生徒が対応した。それぞれで生徒が解決にむけて話を聴き、それを統合して仲裁するという形を作りだした。

Ⅱ 各学部のポスター発表

図 メディエーションの実践



結果



考察

著者の予想を超えて生徒たちは主体的な連携や行動を見せてくれた。これはピア・サポートや、市川・森本・井澤(2021)によるPBISを参考にしたポジティブ道徳カード法の実践により、生徒間の信頼関係が構築されていることがあり、主体的な連携が行われたものだと考えられる。

今後はピア・メディエーションの有用性を確認するためさらなる実践に取り組むと同時に、グループでのメディエーションの実態について考察を進めていきたいと考えている。

参考文献

池島徳大・竹内和雄 2011 ピア・サポートによるトラブル・けんか解決法！－指導用ビデオと指導案ですぐできるピア・メディエーションとクラスづくり－ ほんの森出版

有門秀記【編著】2012 生徒指導士入門テキスト1 生徒指導を深める教育実践の心理 p18-21 学事出版

市川 哲・森本 晃介・井澤 信三 2021 特別支援学校高等部における軽度知的障害を持つ生徒の不登校予防に関する実践－PBIS 第一層支援の観点から－ 第36回学校カウンセリング学会発表論文集

森本 晃介・市川 哲 2022 特別支援学校高等部における軽度知的障害を抱える生徒のピア・メディエーションに関する実践－生徒の主体的な連携による実践－ 第37回学校カウンセリング学会発表論文集

太田ステージを使った 自閉スペクトラム症児童生徒への支援

自閉症研究会

古賀由起

《太田ステージとは》

- ・スイスの発達心理学者であるピアジェの発達理論を参考に作られたもので、発達の節目をステージ分けしたもの。シンボル表象機能の5つの段階を簡便にかつ的確に評価する方法としてLDT-R (Language Decoding Test-Revised 言語読解能力テスト改訂版) を用いて認知発達段階を評価する。

◎「太田 Stage 評価は、何を測っているのか」

シンボル表象機能＝想像力＝考える力⇒認知発達理解度を評価する。

LDT-1 (物の名称)：6種の絵が描かれたシートを名称で質問する。

LDT-2 (物の用途)：6種の絵が描かれたシートを用途で質問する。

LDT-3 (3つの丸の比較)：3つの大中小のまるが描かれたシートを提示し、①一番小さいまるを手で覆ってどちらが大きいかを問う、②一番大きなまるを覆って同じく問う。子どもは指差しで答える。

LDT-4 (空間関係)：名称を言いながら子どもの前に、積み木、ボタン、犬のミニチュア、箱、はさみ、を並べる。次の5つの課題を施行する。①犬を取ってください。②ボタンを箱の上に置いてください。③はさみを積み木のそばに置いてください。④箱をボタンの上に置いてください。⑤積み木をはさみのそばに置いてください。

LDT-5 (保存・包含の概念)：この課題はステージを決める操作基準ではない。Stage IVの前期か後期かを定める判断基準として用いている。白と黒の碁石を用いて以下のように行なう。①黒の碁石を5つ、それと対応させて白の碁石を4つ並べて、どちらが多いか問う。②白の碁石を1つ足して、白黒5つずつ並べてどちらが多いかを問う。③黒の碁石だけを間隔を広げて、どちらが多いかを問う。

◎太田ステージ評価の定義と定型発達児の該当年齢

Stage	定義	定型発達児の該当年齢
Stage I	シンボル機能が認められない段階（無シンボル期）	0歳～1歳半位
Stage II	シンボル機能の芽生えの段階	1歳半～2歳位
Stage III - 1	シンボル機能がはっきり認められる段階	2歳半前後
Stage III - 2	概念形成の芽生えの段階	3歳～4歳の初め
Stage IV	基本的な関係の概念が形成された段階	4歳以上

*** StageⅡ、StageⅢ－１の児童の指導について**

大田 Stage による各 Stage の実態と課題

＜StageⅡ＞シンボル機能の芽生え～

目標～言葉、遊び、描画、模倣など多側面からのシンボル機能の芽生えを促し確実にしていくこと、人への関心の芽生えを適切な方向に伸ばすこと

重点課題～・視覚－運動対応や随意運動の発達を促す

- ・物に名前のあることの理解の基礎を確実にすること
- ・イメージの世界の芽生えを確実にすること
- ・人とのコミュニケーションの基礎をつくること

＜StageⅢ－１＞シンボル機能の獲得～ただし、言葉と結びつくイメージが個人の経験の範囲に限られる→「理解が一義的な段階」

目標～シンボル表象機能の基礎をより柔軟にし、基本的な関係の概念を形成すること、および獲得してきた言葉をコミュニケーション手段として有用に用いられるようにすること

重点課題～・言葉により属性を認識し、言語で表出すること

- ・言葉の世界を豊かにすること
- ・物と物との関係の概念の理解を促すこと
- ・イメージの世界を確実にすること
- ・人とのコミュニケーションを豊かにすること

＜StageⅢ－２＞概念形成の芽生え～言葉で目の前にない場面を想定して行動できるようになる。しかし言葉が分かっているようでも、まだまだ目に見えるものに頼って行動している段階

目標～表象空間をさらに豊かにし、思考の柔軟性を高めること。また、集団での適応行動を身につけるとともに自我形成を促すこと

重点課題～・言葉の意味内容をふくらますこと

- ・物と物との関係の概念の理解を確実にすること
- ・数・量の概念の発達を促すこと
- ・イメージの世界をより豊かにすること
- ・コミュニケーションを活発にすること

* 評価の結果から設定したグループの課題（年間指導目標・内容）

☆名詞理解、動作語、感情の言葉など、言葉の世界を広げること、文字が読めるようになること。要求や拒否、思いを言葉で伝えられるようになって、豊かに育ってほしい。

①言葉の世界を豊かにする・・・歌・手遊びや絵本の読み聞かせをして、そこに出てくる単語や場面をもとにやりとりする。二語文での表現や言葉のやりとりをする。楽しみながら絵と文字を対応させる。

②物と物の関係の理解する・・・数と物を対応させる。比較の言葉（大きい・小さい、多い・少ないなど）絵カードの分類や仲間集めをする（果物・乗り物・色・形など）

③対人関係を広げる・・・簡単なゲームを通して遊びのルールに気づき、「友だちと一緒に」を楽しむ。

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

＊授業で大切にしたこと。教員の確認事項

☆児童が教師への安心感を持ち、「できる」という自信をつけることを大切にしている

< 1 学期 >

① ♪ はじまるよ ♪ 歌と手遊び～名前呼び

② ♪ あたまかたひざポン ♪ → 動作模倣と体の部位の名称を知る。

③ 絵本「できるかな」「数字のうた」

絵本の読み聞かせ。動作模倣。

④ うさぎのふうせん → さいころをころがして、出た色（ピンク・黄・青の3色）と同じ色のふうせん（丸いカード）を同じ色のふうせんに貼る。→ それぞれの数を数える。どれが多いか、少ないか考える。→ **写真と教材の実物提示**

⑤ いすすわりゲーム → 音楽が鳴ったらいすの周りを歩く。笛が鳴って音楽が止まったらいすに座る。

これが定着したので、それぞれが色カード（上で使用している3色）を持ち、同じ色のカードが置いてあるいすに座る、とルールをひとつ増やした。→ **写真と実物カード**

< 2 学期（～ 1 1 月） >

① ♪ はじまるよ ♪ 歌と手遊び～名前呼び

② ♪ からだカルタ → 歌にあわせて、体の部位をさわる。ひじ・あご・おしり・・・

③ ○のつくもの → 頭に同じひらがながつくものの名前。同じ絵を選んで合わせる。ひらがなの単語同士を合わせる。絵カードと文字カードを合わせる。→ **カード提示**

「か」「し」「く」「つ」「ひ」「は」



④ いすすわりゲーム → 絵カードを持ち、同じ絵カードが置いてあるいすに座る。前時に学習した文字の復習をする。



＊③で集団で学習したことを、個別学習で復習し、定着を図る。

< 2 学期から3 学期 >

・数字と数量の「同じ」にも取り組む

参考文献「自閉症の認知発達治療」「自閉症治療の到達点」（ともに太田昌孝・永井洋子編著）

★忍者修行[中学部]★ 発表者:体育科教科会 安部 柴田

目標:①楽しく体を動かす。

②自分で目標物を確認しタッチすることができる。

③目標物の場所を確認し剣を当てることができる。

〈きっかけ〉

生徒の実態はさまざまであるが、体を動かすことが苦手であったり、運動は好きだが体を操作することが苦手な生徒が多いたるグループである。そのため、授業の中で、いろいろな動きの運動を取り入れ、楽しんで取り組める授業を行うことで、1人でいろいろな種目の運動に挑戦し、「できた。」「もっとやってみよう。」という意欲向上につなげていきたいと考えた。

キャリアの観点	活動内容
コー①	初めと終わりの挨拶を意識してする。
コー⑤	呼名に対し返事や身振りで表現する。
協①	みんなと一緒に活動に参加できる。
ルー④	自分の順番を守ることができる。
ルー⑨	時間内に集合することができる。
健⑩	基礎体力や運動能力を高める。

～授業の流れ～

- ① 挨拶
- ② 出欠確認
- ③ ラジオ体操
- ④ リトミック
- ⑤ 休憩
- ⑥ 忍者修行
- ⑦ 挨拶

ボールタッチ	宇宙人をやっつけろ
ボールを跨いだり、潜ったりした後、高さや形を変えた風船に手を伸ばしたり、ジャンプしたりしてタッチする。	チャンバラの剣を使って、天井から吊るしているボールをたたき落とす。力を入れることが難しい生徒は、輪に剣を通して落とす。
	

★課題点★

楽しんで授業に参加できていたが、テンションが上がりすぎて、指示が通りにくいことがあった。



～改善点と今後に向けて～

生徒1人ひとりが、とても楽しみながら授業参加することができていた。しかし、風船が割れてしまったり、目標物を毎回付け直したりする作業があるため、直ぐに付け直すなど工夫が必要であった。全員の生徒が積極的に授業に参加することができていたので、生徒が楽しんでできる授業を今後も考えていきたい。

理科の授業紹介（「酸とアルカリ」の実験を通して）

理科教科会

大井信忠

高等部学習指導要領では理科２段階Ⅰ水溶液の性質の中で、水溶液には酸性、アルカリ性及び中性のものがあ
ることを理解するとともに、観察、実験などに関する初歩的な技能を身に付けること。とされている。高等部２
年生では、後期に酸とアルカリの性質について学習し、身近な水溶液の性質について万能ペーハー試験紙を用い
て調べる実験を行っているが、今回その実験の授業について紹介する。

＊事前の学習で、酸性のものとアルカリ性のものの特徴を比較しながら表にまとめる活動を行った。その特徴か
ら身近な水溶液の中で、酸性のもの、アルカリ性のものを予想しながら１０種類の水溶液を試料として選んだ。

酸性のものは酸っぱい味がするという特徴から梅
ジュースやレモン水、炭酸水などを調べることに
なった。また、アルカリ性のものは苦い味がするこ
とやたんぱく質を溶かす性質があるということから、
青汁や正露丸、石けん水などが選ばれた。

①	梅ジュース	⑥	炭酸水
②	レモン水	⑦	すし酢
③	石けん水	⑧	青汁
④	砂糖水	⑨	虫刺されの薬
⑤	食塩水	⑩	正露丸

＊実験は３人ずつ３つの班に分かれて、下記の注意事項に留意しながら行うように指導した。

- ・１０種類の試料を３人で分担し、自分の担当したものを調べる。（５－③）
- ・試験管から試料を取り出さず、ガラス棒の先に試料を付けて、それを試験紙で調べる。（５－⑤）
- ・使用したガラス棒はその都度、水道で洗う。（５－④）
- ・試験紙は手で触れず、ピンセットで扱う。（５－⑦）

１、班ごとにだれがどの試料を調べるか分担する。決め方は上から順番であったり、３人で回したり、やりたいものを行ったりと班によって違っていたが事前に決めることができた。



２、実験器具の準備や片付けも班ごとに行った。

３、試験管内の試料をガラス棒の先で万能ペーハー試験紙に付け、比色表と照らし合わせてペーハーを相談しながら決定し、水溶液の性質を調べていった。毎回その試料を担当した生徒がガラス棒を洗うこと、ペーハー試験紙は必ずピンセットで扱うことをどの班も守って実験を行うことができていた。色が変わった試験紙を比色表の上に重ね、班内で相談したり、隣の班の結果を聞いたりしてペーハーを表に記入していった。また、液性を記入する欄に酸性、アルカリ性だけでなく、中性や弱酸性、弱アルカリ性なども自分たちで考えて記入することができた。



＊実験の結果については、次の時間に発表した。予想通りであったものもあれば予想とは違ったものもあり、口にするものは基本的に中性であることなどのまとめを行った。また、虫刺されの薬は虫の毒が酸性であることが多いので、アルカリ性のものがあることを伝え、次回の中和についての学習につなげた。

子どもたちが主体的に表現に取り組める音楽指導とは

～1人1台端末(iPad)を活用した音楽授業づくり～

音楽科教科会

中学部 九島多恵 高等部 河田茉優

生徒の実態

感染症が心配で今は歌えない・・・

歌は好きだけど、楽器は苦手。
ピアノって難しそうだな・・・

カステネット・タンバリン・鈴??
小学校でやったけど子どもっぽい
感じがして恥ずかしいなあ・・・



こんな子どもたちと、楽しく音楽がしたい!
楽器を演奏する楽しさを体験してほしい!!
誰もが楽しめる授業をめざして教材選びをしました。

実践報告1

対象生徒 中学部1年 2グループ 15名

※教材1,2,3は、GarageBandを使用

教材1 『笛星人』 ルー⑪ 協-②
「ロック伴奏でみんなノリノリ」(シの音を使って)

- ・速度の変化を楽しむ
- ・音色を自由に選んで演奏する
- ・録音方法を知る



教材2 『Sing Sing Sing』 コー③ コー④
「転調? 耳で心で感じよう」(シ・ドの音を使って)

- ・リズム 3・3・7 拍子に合わせる
- ・転調のタイミングで音を変える
- ・指示された分類から音色を選んで演奏する
- ・録音をして、AirDropで教員に提出する



教材3 『魔法の伴奏』 コー⑧ 見-③
「黒鍵で即興演奏に挑戦」(レ・ミ・ソ・ラ・シの音を使って)

- ・伴奏に合わせて、自由に演奏する
- ・録音した演奏を発表し、互いに鑑賞する



教材4 『リズムを楽しもう』 コー⑥ ルー④
「いろいろな楽器でリズムを楽しもう」

- ・楽器の演奏方法を知る
- ・範奏を聴いて演奏する



成果

- ◎ルールを守って活動することができるようになった。
- ◎表現活動に対して恥ずかしさを感じていた生徒も、進んで表現活動に取り組み、授業内で発表することができるようになった。
- ◎休み時間等にも練習したり、担任に聞いてもらったりする姿が見られるようになった。また、友だちやさまざまな教員に褒めてもらうことで自信につながった。
- ◎音楽の話題で盛り上がるなど、コミュニケーションの幅が広がった。

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

実践報告2

対象生徒 高等部2年 Aグループ 12名

①GarageBand でなんちゃってギター演奏 コー⑧ ル⑪

- ・一人一台 iPad を用意し、あいみょん「マリーゴールド」のコードを作成
- ・U-FRET でコード動画を見ながら、音源に合わせて演奏、録音した



②iPad で DTM (デスクトップミュージック) に挑戦 見-③ 協-②

- ・NHK E テレ「ヒヤダ×体育のワンルーム☆ミュージック」の動画を見て、イメージをつかむ。
- ・スタイル (POP、モダンなど) とコードを選ぶとメロディを自動作成してくれるアプリ
「Flow Machines (SONY)」を使い、気に入ったメロディを選ぶ
- ・選んだメロディに GarageBand で曲に合ったドラム演奏を作成



成果

- ◎どの生徒も iPad が好きで、DTM が得意な生徒を中心に取り組むことができた。
- ◎「音符が読めない」「リズム感がないから」と自信のない生徒も、簡単に作曲できるので熱心に取り組んでいた。
- ◎作品を発表し、生徒同士でコメントを言い合った→(コメントも iPad で提出させたら良かった！)
- ◎YouTube や他のアプリを触ってしまう生徒には「アクセスガイド」を試してみた。
- ◎教員と生徒用 iPad のバージョンが異なっていたり、アップデートを忘れていて同じデータを使えなかったり、保存先の準備が不十分だったりと授業の途中でトラブルもたくさんあった。
予備の用意や事前準備の大切さを実感した。

意欲を高める国語授業の導入

国語教科会

上野山 知洋

中島 陽子

1. はじめに

授業の導入は、その後の活動への意欲や集中力を高めるという点において大変重要である。そこで、今回の報告では、小学部・中学部において授業の導入の実践事例を分析し、「やってみたい」と思える授業作りにおいて大切なポイントを考えてみたい。

なお、本報告での事例は、本校が重点的に取り組んでいるキャリア教育との関連において、小学部での実践は「コミュニケーション力」の項目、中学部での実践は「見通し、行動する力」の項目に該当する。

2. 小学部の「聞く」力を育てる実践

「お話クイズ」

<目的>

授業の集中力を高めるために、毎回導入として行う。

<学習の流れ>

- ① クイズを出す
- ② 答えの選択肢を示す
- ③ 子どもたちが予想を立てる
- ④ お話を読む
- ⑤ 答えを確かめる

お話クイズでは最初に問題を出し、子どもが予想立てていることが、話を聞きたくなる仕掛けとなっている。お話に書いてあったことが「わかった」「楽しかった」という経験が、また次の話も聞いてみたいという意欲につながっているように思う。



3. 中学部の漢字の「読み」の実践

「見たことがある」漢字クイズ

<目的>

生活経験の中で得た知識を生かして、「できる！」という経験を重ね、自信をもってその後の学習に取り組めるようにする。

<学習の流れ>

- ① 「コンビニおにぎりで、好きな具材は何か」など、生活体験についての問いかけをし、発言を促す。
- ② おにぎりのパッケージの写真を提示する。
☆ひらがなの学習段階の生徒にも、好きな具材のパッケージを答えるように促す。
- ③ 生徒の学習段階に応じて、部首の意味を伝えたり、写真を参照するように言葉かけをしたりして、最終的には自分で答えを出せるようにする。

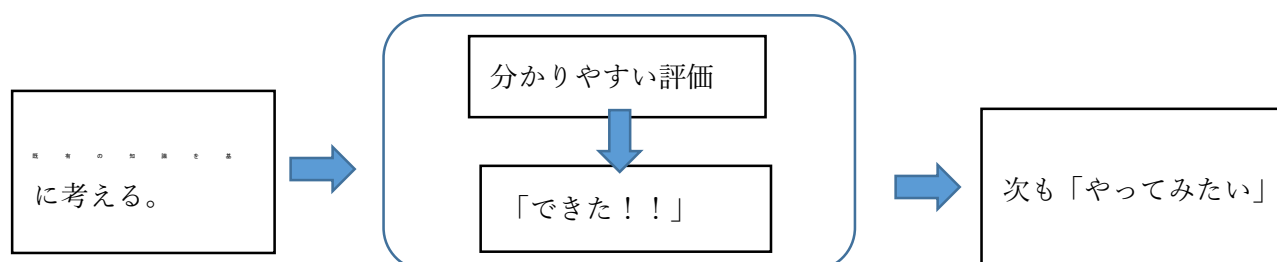
以後、生徒からのリクエストに応じて、インスタントラーメンのパッケージなどを使って、同様の実践を行っている。



4. まとめと考察

小学部での取り組みでは、自分の予想した答えが正解かどうか確かめたいという気持ちが、話を聞く集中力を高め、話を理解できた体験が、「次もやってみたい」という意欲につながっている。一方、中学部の取り組みでは、自分が生活経験の中で身に付けていた知識に気づいたり、ヒントをもとに自分で考えて答えを出せたりすることが自信につながり、「次もできるかもしれない」という期待感をもって前向きに挑戦する姿勢につながっている。

この二つの事例において、既有知識や生活経験をもとに考えること、自分で答えを出せたり、確かめたりできたという成功体験、できたという実感を持ちやすい分かりやすい評価という点が共通しており、「次もやってみたい」という意欲につながったと考えられる。



『子どもたちの讃歌』展—42年のあゆみと心ときめく作品達—

美術科教科会

田中 一恵

『子どもたちの讃歌』の展覧会名称に込められた「さんか」には、障がいのある子どもたちの素晴らしい作品をたたえる「讃歌」と子どもたちが作品を通して社会に「参加」するという意味がこめられています。42年前と子どもたちを取り巻く状況は時代とともに変化していますが、ユニバーサル化が進み、豊かな社会が、当たり前のことになる社会が望まれます。



題名【動くゆび】

1. 伝えたい

1979年大阪府立豊中支援学校の美術教員たちが一枚の作品に心動かされました。

「多くの人々に障がいを持つ子どもは世間で言われているようなかわいそうな子どもたちではない。素晴らしい作品を見ていただきたい。」と学校から飛び出し豊中駅前の画廊から養護学校(当時の名称)に通う児童生徒の作品展が始まりました。

2. 研究会誕生 大阪府下の他の養護学校への呼びかけが始まり、障がいのある子どもたちに対する造形教育の情報交換や、展覧会に向けての話し合いがもたれ、養護学校の美術教育に携わる教員の任意団体「大阪特別支援諸学校造形教育研究会」(現在の名称)が誕生しました。

3. 大阪特別支援諸学校造形教育研究会の42年のあゆみ

	場所	参加校数	特徴	運営費
1979	ときわ画廊	1校(豊中支援学校)		
1980	大阪駅前第2ビルアートプラザ	6校	前後期制で1校3日	・研究会会費 ・助成金 ・ポストカード販売
1996 1999	大阪府立現代美術センター(中の島)		20回展 ・パネルセッション・映画会	・研究会会費 ・助成金 ・クリアファイルなど販売 ・ポスターなどの外注開始
2000	大阪府立現代美術センター(谷町4)	26校→29校	30回展 ・立体テーマ(大阪名物)の	・ポストカード販売 ・減免申請で会場費無料 ・運搬トラック借り上げ



Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

			展示 来場者2000 人	
2012 2013	湾岸ギャラリー CASO	42 校	全館利用 ・ワークショップ (変化する 作品)	・ポストカード販売 ・会場費用発生・運搬トラック借り 上げ
2014	大阪市立美術館		第2展覧会室	・ポストカード・クリアファイルなど 販売 ・運搬トラック借り上げ
2018		46校	第1・2展覧会 室 40回展 来場者4000 人 作品数4000 点	・クリアファイルなど販売、新グッズ 販売模索中 ・会場が広くなる ・運搬トラック借り上げ値上がりや 台風対策 ・会場費用減免終了の可能性発生 ・海外からの来場者が増える、来場 者案内表示(韓国語中国語)の設 置
2019		47校		
2020 2021	41 回展中止 42回展中止			・デジタル事例研究集を発行 ・web 展覧会を企画
2022	43 回展は大阪府立江之子島文化芸術創造センターにて実施計画中			

4. 研究会の活動

①子どもたちの讃歌展実施(4月より8月上旬にかけて5回程度の会議、参加校で23パートの役割を担当し準備を進める。搬入搬出、会期中の運営など)

②研究活動 2・3 学期に各1回、各校を巡回し校内案内、授業見学、ワークショップなどを実施

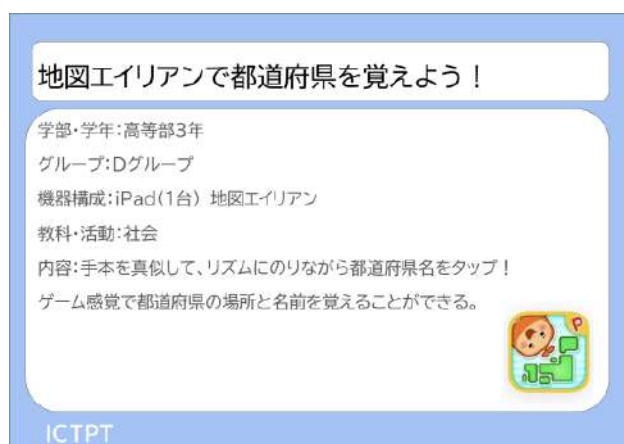
③PR 活動として 教育委員会主催展示会出品、てんかんアート展、スペシャルオリンピックス展示、日本教育美術連盟など研究会講演、実践発表、ポスターセッションなどへの参加

5. 児童生徒にとっての展覧会

展覧会は、授業で作られた作品が、いつもとは違う大きな美術館に展示されているという体験をすることによって、心地よい刺激や驚きがあります。美術館で見ただけの機会を活用し、生の感動を受け、他者から褒められることで自己実現でき、誇らしい体験の場となります。自分の作品を発表したい、見てもらうためにも頑張って制作したいなど意欲が高まることもあります。鑑賞後は作者に感動や感想を伝えるなど、誇らしい気持ちを共感して児童生徒にフィードバックしていただけたらより効果も上がります。

コロナ禍でここ2年、展覧会が中止となってしまいましたが、再開されることを願わずにはいません。

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表



Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

AIで作曲したものをアレンジ！

学部・学年：高等部2年 Aグループ

機器構成：iPad(1人1台)、GarageBand、FlowMachines

教科・活動：音楽

概要：FlowMachinesで好みのメロディを探し出したものを、GarageBandで読み込み、メロディにあったリズムをつける。

出来上がったものをみんなで鑑賞しあい、感想を発表する。



ICTPT

AIで作曲したものをアレンジ！

FlowMachinesで作ったメロディ(ベース・コード含む)が保存されたMIDIファイルをGarageBandでインポートし、再生しながらリズムをリアルタイム録音した。

完成後のファイルはAirDropで提出し、鑑賞を行った。



ICTPT

ドラム演奏を録音、鑑賞する

学部・学年：高等部2年 Aグループ

機器構成：iPad(1人1台)、iRig Pro、マイク、Bandlab

教科・活動：音楽

概要：DVD(ボチボチ)にあわせて演奏するドラムを個人別に分けて録音し、それぞれの演奏を鑑賞・良りよい演奏に向けたアイデアを共有する。



ICTPT

ドラム演奏を録音、鑑賞する

Bandlabにドラム録音用プロジェクトを作成し、演奏者ごと(演奏ごと)にトラックを分けて録音する。

トラック別に再生し、それぞれの演奏を確認する。



ICTPT

1人1台端末の活用

学部・学年：高等部2年 Dグループ

機器構成：iPad(1人1台)、Quizziz

教科・活動：社会

概要：都道府県の学習に1人1台端末とクイズ作成サイト(Quizziz)を活用し、生徒が自分のペースで学習を行えるようにした。また、一斉クイズで簡易的なテストとして取り組みを行った。

クイズは、事前学習としてプリントや動画によって学習するものや、Quizziz内のホームワークモードで学習に取り組んだ上で、全員一斉でクイズに参加する形式(Live Quiz/Instructor-pacedモード)。

ICTPT

1人1台端末の活用

電子黒板に教員画面(操作用画面)を表示

解答の状況や選択肢の誤明、ランキングなども表示



ICTPT

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

1人1台端末とGoogle Workspaceの活用

学部・学年: 高等部2年 Aグループ

機器構成: iPad (1人1台)

Google Workspace(Classroom, Form, Jamboard)

教科・活動: 家庭

概要: Classroomの授業・課題機能を活用し、被服実習で使用する生地に関する調べ学習の結果をClassroomの課題へ提出する。

課題で示された手順で採寸した数値をFormに提出、採寸の様子を撮影し写真とコメントをJamboardに入力、取り組みの内容をグループに共有する。

提出された課題は、ルーブリックで示している内容にもとづき採点し、個別にフィードバックする。

ICTPT

1人1台端末とGoogle Workspaceの活用

Classroomの課題ページ



課題の提出状況を確認



ICTPT

1人1台端末とGoogle Workspaceの活用

右: 課題の説明

下: 課題に設定したルーブリック



ICTPT

1人1台端末とGoogle Workspaceの活用

Jamboardに写真を挿入

挿入したボードに
手書きでコメント



クでフィードバック

ICTPT

マイクラで「住居計画」

学部・学年: 高等部2年 Aグループ

機器構成

iPad & Chromebook & PC (1人1台)、Minecraft Education Edition

教科・活動: 家庭

概要: 安全で快適な住生活のシミュレーションを目標に、マイクラで住居を設計しグループ全員で住居を完成させる。

ICTPT

マイクラで「住居の計画」

- 住んでみたい住居の図面を参考に、マイクラ経験者を中心に間取りや外観を作成。
- マイクラ初心者にはキャラクターの移動や持ち物の管理、ブロックの配置などをお互いに教えあいながら、内装仕上げを行った。



ICTPT

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

学校行事のロゴ制作

学部・学年：高等部2年 ABCDEグループ

機器構成：iPad(1人1台)、Adobe Fresco、電子黒板

教科・活動：作業(情報)、情報、社会



概要：文化祭で使用する缶バッジデザインの公募にあわせ、デザインアプリ(Adobe Fresco)を用いて、ロゴデザインを行った。

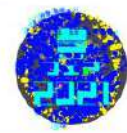
自らブラシ・色の選択し彩色を施したレイヤーを制作後、フォントの異なる7つの文字デザインレイヤーから1つ選択し、ロゴを制作した。

異なる学習グループと共同で制作したものもある。

彩色：Eグループ、レイアウト・仕上げ：Aグループ

ICTPT

学校行事のロゴ制作



ICTPT

GIGAスクール端末を活用した児童生徒会選挙中継

学部・学年：全校行事

機器構成：PC、iPad、NDI HX Camera、NDI Monitor

教科・活動：児童生徒会選挙



概要：全児童生徒が集合する行事を行うことができないため、各字部の集合場所(6か所)に映像・音声を配信し、立会演説会を実施。

ICTPT

GIGAスクール端末を活用した児童生徒会選挙中継

配信側

演説会場(PC室)にPC、ビデオカメラ、マイクを設置

PCで配信ソフト(OBS)で立候補者名やポスターを合成しNDIで配信

受信側

iPadやPCのNDI Monitorで配信映像を受信し、TVやプロジェクターで視聴



ICTPT

(参考)NDIとは

NewTek社の提唱するIPネットワークで映像、音声をやり取りする規格。

同軸ケーブル(アナログ)やHDMIケーブル(デジタル)ではなく、LANケーブルやWiFiで映像・音声をやり取りするもの。

PCで送受信するソフトは無償で配布されている。iPadアプリは有償。



Making IP video a reality for you...

ICTPT

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

いもたろうクイズ

学部・学年: 中学部2年生

グループ: 1グループ

機器構成: iPad、Quizizz

教科・活動: 理科社会

内容: 授業で観察したアゲハチョウ(通称いもたろう)の成長過程についてクイズを出題し、振り返りを行った。



ICTPT



・音楽が鳴ったり、ランキングが出たりするので、ゲーム感覚で取り組むことができた。

・タブレット使用中にインターネットが切断されてしまう場合があるため、予備があると良い。

ICTPT

2教室に分かれての同時中継授業

学部・学年: 中学部1年

グループ: 1グループ

機器構成: iPad 2台、NDI HX Camera、NDI Monitor

教科・活動: 外国語1、自立活動等

内容: 集団での授業参加が難しかったり、特定の教科に苦手意識がある生徒が別室で授業を受ける際に、メインの教室での授業を見られるようにNDIというソフト(アプリ)を活用し同時中継している。



ICTPT



▼受信用iPad(サブ教室)

▲中継用iPad(メイン教室)

ICTPT

時計を覚えよう

学部・学年: 高等部1年 CDグループ

機器構成: iPad(1人1台)アプリ「とけいパズル」「とけいあそぶ」

教科・活動: 作業(情報)

概要: 知育アプリ「とけいパズル」と「とけいあそぶ」の二つのアプリを使用し、時計を認識できる様に繰り返し練習した。生徒それぞれの時計の認識状態に合わせて、レベルを設定して繰り返し練習した。



ICTPT

手話歌「あわてんぼうのサンタクロース」

学部・学年: 小学部4年

機器構成: iPad、動画編集アプリ「CapCut」

教科・活動: 音楽



概要: 教員が撮影した手話歌の手本動画に、動画編集アプリを使って画像やアニメーションを付けた。歌詞にリンクした画像を入れることで、歌詞と手話のつながりをわかりやすく示すことができた。児童の興味関心も引くことができ、意欲的に取り組む姿が多く見られた。

ICTPT

Ⅲ 教科会、教科研のポスター発表

感染症対策で教室間を生中継し発表・観賞する

学部・学年: 小学部 4年

グループ: 音楽

機器構成: iPad(送信1台・受信1台)計4台、
iRig Pro、マイク、NDI HX Camera、NDI Monitor

教科・活動: 音楽

内容: 感染症対策で2部屋に分かれ授業を実施することになり、同じ内容で取り組んでいるお互いの様子を発表・観賞した。

ICTPT

感染症対策で教室間を生中継し発表・観賞する

発表の最中は観賞相手の様子を映すことで、発表の妨げにならないよう実施した。

映像があることで、普段以上の取り組みをみせる児童もいた。



ICTPT

小学部 修学旅行事前学習

学部・学年: 小学部 6年

グループ: 学年全体

機器構成: プロジェクター 4台、iPad 4台、現地下見で撮影した映像

内容: 水族館特有の環境(薄暗い中の鑑賞)で集団行動をする練習に、集会室に水族館風的环境を用意した。

パーテーションとブルーシートで室内を間仕切り、超単焦点プロジェクターで壁面に3つの水槽に見立てた映像を投影。集会室設置のプロジェクターの映像を大水槽とし、薄暗い室内で移動・鑑賞の練習を行った。

ICTPT

小学部 修学旅行事前学習

用意した映像は、事前に下見で撮影した現地の映像をiPadで再生。

パーテーションには順路の表示を行い、経路の途中には水槽以外の展示を行い、現地の環境に近づける工夫を行った。



ICTPT

支援部公開研修

学部・学年:

使用機器: GoogleWorkspace(豊中支援独自のもの)
Form、サイト、Youtube Studio

内容: 地域に向けた公開研修実施に向け、Googleサイトに告知ページを設置し、Google Formで申込登録や事後アンケートを実施した。

担当者間の連絡や外部から問い合わせはGoogleグループで情報共有を行った。

ICTPT

2ページ目 詳細



ICTPT



豊中 安全安心 HOT ホッと PROJECT 実践報告

↑ 豊中安心サポーターズ
キャラクター TAS じえる

【HOT ホッと PT（学校経営推進費 PT チーム）】上戸 伸恵

1. 事業計画の概要

計画名	豊中 安全安心 HOT ホッと PROJECT (PTA との協働で創り出す、災害時にも役立つ教育環境整備)
事業目標	災害発生時に備えて、防災、減災グッズを授業に活用し日常化することで、自らの命を守り抜く「自助」のための「主体的に行動する態度」を育成し、保護者との「共助」で非常時も安全で安心な学びの場を創造する。

2. 3年間の取り組み計画



3. 主な整備物品

ミラリスピーカー 	テント各種 	蛍光灯カバー 	ポータブル電源 	エアベッド 
--	---	--	--	---

4. 今年度（3年目）の実践

広報活動	PTA との協働
◎ぼうさい甲子園応募(R3. 11) ◎学校 Blog での発信   R2 年度より、兵庫県等が主催している『ぼうさい甲子園』に応募しています。今年度は減災や縮災に繋がる取り組みが評価され、【URレジリエンス賞】の受賞校に選定されました。また、学校ブログでの備蓄品紹介を始めました。(QR コード)	◎バス車庫整頓 (R3. 7)、飛散防止シート貼り(R3. 12)   夏季休業中に PTA 保健・防災委員のメンバーと PT メンバーが協働し、蛍光灯カバーの取り付け作業を行いました。バス車庫倉庫に収納している災害備蓄品も整理しました。冬季休業中には、大規模災害時の一次避難場所に指定している体育館に(窓ガラス)飛散防止シートの取り付け作業を行いました。

5. 学校生活アンケート、学校教育自己診断による評価 (R3 年度)

対象	診断内容	評点 (評価)
生徒	先生は、地震や火災などが起こった場合、どうしたらよいか教えてください。	79.4 (○)
保護者	学校は、防災や防犯など非常時に対する取り組みを適切に行っている。	82.7 (◎)
教職員	わたしは、施設・設備管理などを含めた学校防災に対しての意識が高まっている。	73.0 (○)

昨年度から継続されている新型コロナウイルス感染症対策とも重なって、毎年、評点が高い傾向にあります。

6. PT より

本校のグランドデザインには『防災教育』が大切な観点のひとつとして描かれています。今後も【日常使いのできる備蓄品】を様々な活用し、非常時においても児童生徒が（自分に合った手段で）主体的に命を守る力の育成に向けて働きかけていきます。

また、本事業の計画当初に掲げていた、保護者や地域の皆さまにも備蓄品を体験していただける企画を学校行事のなかで実現できればと考えています。



お助け ONE 太

支援学校における同和教育の取組み

－相手の気持ちを考える豊かな人間関係をつくるために－

府立豊中支援学校 古澤 篤・星 理子

1 とともに生きる

本校は知的障がいのある子どもたちの通う支援学校で、小学部・中学部・高等部の3学部、約420名の児童生徒が在籍している。私たちが所属する中学部2年生は、生徒数42名で4クラスある。教科の学習は発達段階別に、4つのグループに分かれて行い、それ以外は学年全体で学習している。障がいのある子どもたちの社会的自己実現をめざして、それぞれのコミュニケーション力や自己決定力を高めるための教育に、学校教育全般を通して取り組んでいる。

共生社会の形成に向けての取組みが進む中、卒業後子どもたちは社会の中で自己実現をめざすことになる。多様な子どもたちが、出会いを通して、社会の中でよりよく生きていくことは、私たちの願いである。

2 教職員の研修

今年1月、豊中市人権平和センターより講師をお招きし、同和問題について話を聞いた。また昨年度受講した研修の資料をもとに「同和問題に関する校内研修」を実施した。

研修後のアンケートで、「これまでの同和問題に関する意識が変わりましたか」という質問に「大いにそう思う、そう思う」と回答した教職員は81%に及んだ。「同和問題に関する人権学習の取組みについてイメージを描くことができたか」という質問には「大いにそう思う、そう思う」との回答を84%以上得た。「あまり思わない」と回答した理由の中には、「知的障がいのある子どもにどのように指導すればいいのかかわからない。」「支援学校の生徒に伝え、理解させることはとても難しく感じる。言葉だけがひとり歩きしそうで怖い。」などという意見があった。

3 生徒の様子

自閉スペクトラム症を含む広汎性発達障がい、または学習障がいのある生徒が多い。生徒たちは全体的にとっても仲が良く、学習意欲も高い一方で、障がい特性からくる「対人関係およびコミュニケーションの障がい」、「こだわりや興味の偏り」、「経験不足によりうまく物事に対応できない」、「見通しが持てないことによる不安感」などがみられ、特にコミュニケーションに関する課題を多く抱えている。このような特性があることと、発達年齢段階の異なる集団であることを考慮し、授業では以下のような工夫をした。

4 授業の工夫

まず自分事として考えることができるよう生徒たちにとって親しみやすい例を引き、身近な問題として扱った。視覚優位の生徒に配慮し、理解の助けになるよう絵本やイラストを使用した。生徒からの発信をできるだけ受け止めるため、自発的な発言以外に選択的回答を用意するなど答え方に工夫を加えた。テーマに応じてクラスまたはグループ単位で集まり、考える時間を大切にした。クラスでは司会の生徒が中心となって話し合いを進め、どの生徒も参加できるように、記録や発表などの役割を分担した。クイズで生徒の理解度を確認しながら、次の授業プランの参考にした。さらに、学年目標と学校教育目標の観点を持つことで、教職員の意識付けを図った。

5 中学部1年次における取組み

昨年度は同和問題に関する人権学習を2回実施した。学年目標にある「思いやり」「助け合い」のテーマに沿って授業を展開した。

「同和問題の根底にある偏見や決めつけが
起こる仕組みを知る」、「聞いたことが正しい
か
どうか確かめようとする態度を身につける」
といった情報リテラシーに関すること、そし
て「相手の気持ちを考えて、勇気をもって行動
する心情を育てる」ことをねらいとして、絵本
を教材に授業を行った。

6 中学部2年次における取組み

今年度は昨年度に続き、学年目標の観点か
ら「おもいやり」「自立」に注目しながら、基
本的人権や同和問題について学習した。そし
て、動画教材を活用し、自分たちで考えるこ
との大切さを学んだ。また、情報リテラシー向上
への取組みとして、迷信やうわさについて考
えた。フィクションの動画を通して、自分たち
の仲間が差別にあう疑似体験もした。体験を
通して、差別を自分の問題として捉えること
で、同和問題への気づきを促した。自分が困
っているときに、相手に配慮しながら自分の
気持ちを伝えるコミュニケーションの方法に
ついても学習した。

友だちとの日常を扱った絵本を教材にした
学習では、積極的な発言が多く見られた。実際
に友だちとトラブルになったとき、自分の受
けた被害の視点からしか理解できない、説明
されても自分が非難されていると思い込み、
客観的な状況理解に時間のかかる生徒もいる
のだが、後で冷静になって思いやりの心を示
し、「決めつけるのはよくない」と発言する生
徒もいた。

クラスのイメージや偏見について扱った学
習では、迷信よりも自分の経験に基づいて話
す生徒が多かった。一方で、新しい考えの受け
入れには、経験の積み重ねや、スキルの習得へ
の丁寧な指導が必要だと感じた。校長が理不
尽な決め事を出すという設定で作成した動画
は、非常にインパクトがあり、これには普段発
言しない生徒も「ひどいなあ」と発していた。
また、「校長先生に言いに行く」と訴える生徒
もいたが、「これはみんなに考えてもらうため

につくったものであり、事実ではない話」と分
かった瞬間、生徒たちはどよめき、歓声の声が
上がった。そこから「昔は本当にこのような差
別を受けた人たちがいた」という学習につな
げた。

相手の気持ちを尊重しながら自分の気持ち
を伝えるトレーニングでは、自分の意見をは
っきりと述べるができる生徒がいた一方
で、どのように伝えたらよいのかわからない
生徒も少数いた。このような生徒に対し、アサ
ーティブなコミュニケーション方法などの
SST は効果があるだろう。

7 支援学校の同和教育

人権教育は、教育の原点である。また、障
がいがあるからといって、教育をうけられない
ということがあってはいけない。「冷静さと思
いやりが人権意識の育成や普及にプラスの効
果を持ち、主体性のなさがマイナスの効果を
持つ」（「続・人間の血は涸れず」（とよなか人
権文化まちづくり協会）より引用）という言葉
にあるように、私たち一人ひとりの生活と結
びついた自分の生き方と関わることで受
け止めることが大切である。

発達年齢段階の異なる子どもたちのいる支
援学校でどのような同和教育ができるのだろ
うか。例えば、クラスの中心的な立場の生徒に
対しては、友だちのことをよく理解できるよ
うに教職員が導く一方で、集団の中で自分が
役に立つという喜びを感じ、やる気や責任感、
リーダーシップを育む取組みが考えられる。
また、周りの生徒は、自分のことを気にかけて
くれる友だちがいることで、クラスが安心の
場になる。このように一緒に遊んだり学んだ
りする環境の中で、お互いに刺激し合って成
長することができる。

同和問題の本質は他の人権課題にも通じる
支援学校の子どもたちが、人権を大切にする
価値観を身につけ、豊かな人間関係をつくる
ことができるように、これまでの教育活動の
中に人権教育の観点を積極的に取り入れてい
く必要がある。

「国語」（グループ）学習指導案

大阪府立豊中支援学校

T 1 笠脇 磨未

T 2 森岡 恵

T 3 中村 賢司

1. 日時 令和3年10月6日（水） 第3時限（10:30～11:20）

2. 場所 第4学年 2組教室

3. 学部・学年・組 小学部 第4学年 きめつグループ 9名

4. 単元名 「どーれだどれだ？」

5. 単元目標

- ・それぞれのひらがなが表す音を知り、ひらがなを読むことができる。（知・技）
- ・教員の話に応じて、質問に答えたり模倣したりすることができる。（思・判・表）
- ・ひらがなに関心を持ち、自分から読もうとする態度を養う。（学）

《特別支援学校 小学部「国語科」 第2段階》

6. 児童観

本グループは特殊音節を含むひらがなもある程度読み書きができる児童から、ほぼひらがなの読み書きが難しい児童までが在籍する実態の幅の広いグループである。

また、ひらがなは読めても自信のなさや恥ずかしさなどから人前では小さな声になったり、発音が不明瞭なため文字と音の関係をとらえにくく、「ひらがなを読む」ことに対して消極的になったり、それぞれがなんらかの課題を抱えている。

個別学習中は集中して取り組める場合が多いが、集団学習になると、教材との距離が遠くなりがちなことや、グループの人数が多いので他の児童の発表中などに興味が別のことに移ってしまうことなどから、自分も授業に参加している一員であるという気持ちが薄れ、授業への集中が保ちにくい。そのため、2学期からは、「話している人のほうを向いて話を聞く力」を伸ばすため、集団学習も活動への参加のしやすさを考慮し2つのチームで展開している。

7. 教材観

文字の読み学習をするにあたり、まずは文字同士のマッチングをしたり、リズムに合わせて絵カードとひらがなのマッチングをしたりするのを繰り返すことで、音と文字の結びつきに気づいてほしいと考えた。そのため「ひ」「め」など1文字の有意味語から学習することで、ひらがなは原則として1文字で1音を表すというのに気づきやすくした。また、文字が多くあると読むことに抵抗感が大きくなる児童にも取り組みやすくするため、「あし」「はな」などの身体の部位や、「はれ」など天気に関する言葉など、グループの児童にとって身近な単語を扱う。

使用する絵カードは、絵が大きく描かれシンプルでわかりやすいものや、教室での掲示に使用されていて見たことがあるものを選び、手に持ちやすい大きさにした。ひらがなカードは見やすさに配慮してユニバーサルデザイン書体を用いて作成し、プラスチックボードに貼り付けて厚みを持たせることで、ミニホワイトボード上での操作がしやすいようにした。また、スタンプは数種類の中から自分で好きなも

のを選べる仕組みとしキャリアの観点からも自己選択・自己決定できる場面とした。

さらに、「どれだどれだ」では歌の速さを変えたり、提示するひらがなの数を変えたりすることで難易度を変えられるため、児童の実態に合わせて出題しやすく、「次もクリアできるようにがんばりたい」という気持ちも引き出しやすく、楽しい雰囲気での学習を進められると考え、この教材を選定した。

8. 指導観

約1年前に現在のグループとほぼ変わらないメンバーで、「おべんとうバス」でひらがなの読みの学習に取り組んだが、ひらがなの読みへの苦手意識が強かったこともあり、絵本の音読には至らなかった。

こうした実態を踏まえ、グループの児童に身に付けてほしい力について担当教員間で話し合った結果、「読む」ために必要な力を底上げすることで、結果としてひらがなの読みへの抵抗感が薄まり、学習しやすくなるのではないかと考えた。そこで今年度は、「音韻意識」と「正しく聞く力」、「正しく発音する力」の3つに注目し、ひらがなの習得に取り組む。また、集団学習では「話をしている人(T1)に注目する力」の育成を図ることで興味の幅を広げ、グループ以外の時間でも集団での活動に意欲的に参加できるようつなげていきたい。

そのため本単元では、「字形の違いに気づく」「ひらがなを見て正確に発音する」「ひらがなでは原則として1文字が1音に対応している」と気づくための課題を設定した。それぞれの問題に正解するとカードにスタンプが押せる仕組みとし、目に見える形で自分の頑張りがわかるようにしたい。さらに、スタンプを20個めるとお楽しみのシールをもらえるようにすることで、苦手なことにも挑戦し、次も頑張ってみようという意欲を引き出し、期待感をもって学習できるようにしていく。

9. 単元の評価規準

①評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
①文字と音の対応や、字形の違いに気づき、ひらがなを読んでいる。	①教員の手本を聞いて、真似して発音しようとしている。 ②教員の質問にことばやジェスチャーで答えている。	①提示されたひらがなを自分から読もうとしている。 ②ひらがなを見聞きして気がついたことを伝えようとしている。

②キャリア教育の観点

1 コミュニケーション	2 協調する力	3 ルール理解・遵守力
①あいさつをすることができる。 ②自分の要求・意思を伝えることができる。 ⑤呼名に応じることができる。 ⑥話を聞き、理解できる	①集団に参加できる。 ④我慢できる。	④順番を守ることができる。 ⑪道具を正しく使うことができる。
4 健康管理力	5 役割遂行力	6 見通し、行動する力
⑧感染を予防することができる。	④準備、片付けができる。 ⑨評価を受け入れて、実行力を高めることができる。	①様々な情報から必要なものを得ることができる。 ②見通しを立てて行動することができる

V 教職員の授業研究

	⑩役割遂行することができないときに、助けを求めることができる。 ⑫作業のミスに気づき、修正することができる。	できる。 ③自己選択・自己決定することができる。
--	---	-----------------------------

10. 単元の指導と評価の計画（全9時間、本時は第8時）

次	時	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価 規準
第1次	1	・同じもの探しをする。	・6個の記号（干・くなど）の中から手本と同じ記号を探す。	・違いの分かりやすい簡単な記号で練習し、マッチングのやり方の定着を図る。	B②
第2次	2 3 4 5	・ひらがなのマッチングをしたり、絵カードに合う1文字のひらがなを探したり読んだりする。	・「どーれだどれだ」のリズムに合わせて、見本と同じ字を探したり、絵カードに合うひらがなを探したりする。 ・ひらがなカードを見ながら教員の手本を聞いたり、絵カードをヒントにしたりして、ひらがなの読み方を覚える。	・リズムに合わせてタイミングよくゆびさしするよう促す。 ・児童によって提示するひらがなの個数や選択肢の難易度を変える。 ・「て」や「め」など1文字の有意味語を中心に学習を行う。 ・カードを見せながら手本を示すことで、絵と文字と音の結びつきを伝え、読み方を覚えやすくする。	A① B① C①
第3次	6 7 ⑧ 9	・教員が発音する単語や、絵カードに合う文字をひらがなカードの中から探して読む。 ・語頭音が同じ言葉を考えたり、字形の似ている字を探したりする。	・天気や身体の部位などの絵カードを選び、3～10個程度のひらがなの中から絵カードに合うひらがなを探して並べ、読む。 ・解答者役だけでなく、出題者役も経験する。 ・教室内の掲示物から同じ音で始まる言葉を探したり、字の形に注目してひらがな表を見たりする。	・児童の実態に応じて、歌の速さや提示するひらがなカードの数を換え、取り組みやすくする。 ・友だち同士の活動を取り入れることで活動の幅を広げる。 ・同じ音の言葉集めや字の形に注目する学習を取り入れることで、音と文字の結びつきを意識しやすくする。	A① B② C②

11. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・文字の理解に応じて教材を提示し、それに答えたり伝えたりすることができる。
- ・絵カードを見たり、教員の話の聞いたりして、質問に答えることができる。

(2) 本時の評価規準

- ・教員の話や絵カード、文を理解し、適切なひらがなカードを読んだり、絵を選択したりしている【A①】
- ・絵カードの内容に関する事など、教員の質問に言葉やジェスチャーで答えている。【B②】
- ・ひらがなを読む活動の中で、文字を見て気がついたことを自分から伝えようとしている。

【C②】

(3) 本時で扱う教材・教具

ホワイトボード、スケジュールカード、はてなボックス、ひらがなカード、絵カード、顔写真、名札カード、スタンプ、スタンプカード

(4) 児童の実態と本時の目標

	児童の実態	本時の目標	支援の手だて	評価規準
A	・文字学習への抵抗感が非常に強かったが、読み聞かせ中の絵本の文字を指で追うようになった。 ・自分の名前は形として覚えている。 ・3音までの単語は発音できるものが多い。	・絵カードに合う2文字のひらがなを、5～10個のひらがなの中から選び、自分で読むことができる。	・自分の名前に使用するひらがなを中心に課題したり、ヒントカードを用意して取り組みやすくしたりする。	・正しいひらがなカードを見つけて並べ、一文字ずつ音の分かれ目を意識して読んでいる。
B	・文字学習に苦手意識があるが、自信を持てると率先して取り組む。 ・数個のひらがなが読める。 ・手本を聞いて真似して発音できる。 ・緊急事態宣言中は欠席。	・教員の質問を聞いて該当する自分の身体の部位を手で示したり、ひらがなを見ながら教員と一緒に読んだりすることができる。	・自信を持って取り組めるよう、当てる順番を後にして友だちの活動を見てイメージを持てるようにしたり、ゆっくり発音して聞き取りやすくしたりする。	・指示された身体の部位を正しく示したり、ひらがなカードを見ながら教員の手本を聞いてひらがなを読んだりしている。
C	・周りの様子が気になりがちだが、1学期末からなぞり書きに熱中し、自分で字を読もうとし始めている。 ・数個のひらがなが読める。 ・発音は不明瞭だが、伝えたい気持ちは強くある。	・絵カードに合う2文字のひらがなを、5～10個のひらがなの中から選び、自分で読むことができる。	・該当する単語を繰り返してはっきりとした発音で1音ずつ伝え、音から文字を思い出しやすいようにする。	・自分で正しいひらがなカードを見つけて並べ、1文字ずつ音の分かれ目を意識して読んでいる。

V 教職員の授業研究

D	・気になることがあると課題に集中しにくいが、作業的な課題には意欲的に取り組みめる。 ・清音のひらがなを逐次読みできる。 ・手本を聞いて真似して発音できる。 ・緊急事態宣言中はほぼ欠席。	・絵カードに合う1文字のひらがなを2～5個のひらがなの中から選んで枠に合わせて置き、教員の指示を聞いて読むことができる。	・探す文字を具体的に言葉がけして伝えたり、カードを置く場所がわかりやすいよう枠を用意したりする。	・枠の中に自分で正しいひらがなカードを見つけて置き、大きな声で読んでいる。
E	・気持ちが不安定的になることがあるが、促されたり、教員の手本を聞いたりすると清音のひらがなが読める。 ・サ行など発音しにくい音がある。 ・緊急事態宣言中はほぼ欠席。	・教員の質問を聞いて該当する自分の身体の部位を手で示したり、ひらがなを見ながら教員と一緒に読んだりすることができる。	・自分から声を出しにくそうな場合は、音がイメージしやすいよう、口の動かし方を見せる。	・指示された身体の部位などを正しく示したり、ひらがなカードを見ながら教員の手本を聞いてひらがなを読んだりしている。
F	・気になることがあると課題に集中しにくかったり、天候により気持ちが不安定になったりするが、視覚支援がある取り組みめる場合もある。 ・ひらがなの逐次読みができる。 ・手本を聞いて真似して発音できる。	・着席して教員の質問を聞き、正しいひらがなカードを選んだり、指示を聞いて読んだりできる。	・ミニホワイトボードを近くに用意し、絵や文字で活動内容をわかりやすく伝え、安心して参加できるようにする。	・一定時間着席して教員の話聞き、正しいひらがなカードを選んだり教員の手本を聞いて真似して読んだりできる。
G	・姿勢が崩れることが多いが、興味のある課題には、自分から質問するなど集中して取り組みめる。 ・特殊音節の単語が読める。 ・どの音も問題なく発音できる。	・簡単な文を自分で読み、正しい絵を選ぶことができる。	・活動に取り組みやすいように本児の興味のある事柄を文の題材にする。	・2～3行程度の文を読み、文の内容を表している絵を選択肢の中から選ぶことができる。
H	・集団学習だと学習に集中しにくい、質問等には正しく答えられる。 ・特殊音節の単語が読める。 ・小さな声だが正しく発音できる。	・簡単な文を自分で読み、正しい絵を選ぶことができる。	・活動に取り組みやすいように本児の興味のある事柄を文の題材にする。	・2～3行程度の文を読み、文の内容を表している絵を選択肢の中から選ぶことができる。
I	・新しい課題には苦手意識が強く慣れるのに時間がかかる。 ・特殊音節の単語が読める。 ・指示待ちになりがちだが、手本を聞いて真似して発音できる。	・簡単な文を自分で読み、正しい絵を選ぶことができる。	・活動に取り組みやすいように身近な題材を文の題材にする。	・1～2行の文を読み、文の内容を表している絵を選択肢の中から選ぶことができる。

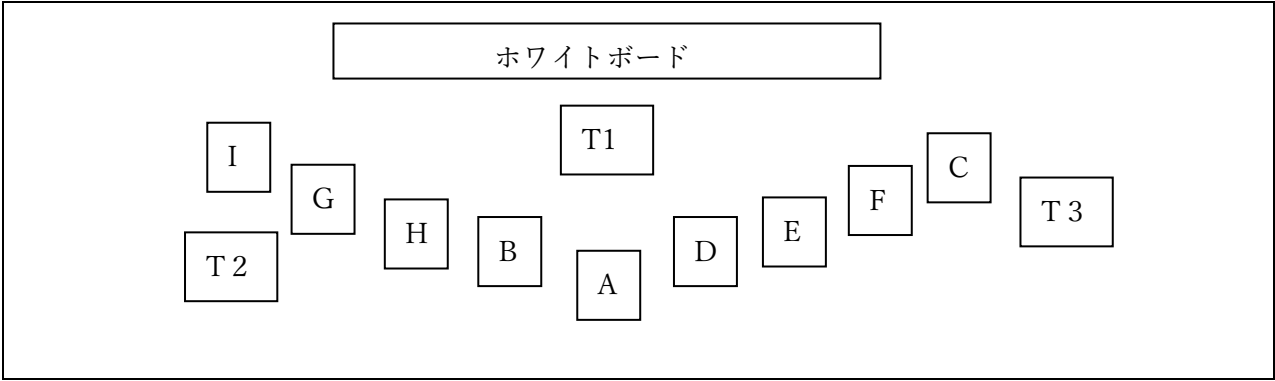
(5) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び 支援の手だて等	評価規 準	キャリア の観点
	マスクを着用する。	授業全体を通して、コロナウイルス感 染症予防のためマスク着用を促す。		4－⑧
10分	はじめのあいさつ ・教員の号令であいさつをする。	・椅子に名札を貼っておき、自分の座 る位置をわかりやすく示す。 ・姿勢を正すよう言葉がけをし、一緒 にあいさつをするよう促す。		1－①
導 入	しゅっせきしらべ ・名前を呼ばれたら手を挙げて「は い」と返事をする。	・はてなボックスから1個ずつ名札カ ードを取り出し、大きな声で名前を呼 ぶ。		1－⑤
	・代表者が前に出て、名札カードを数 え、出席者と欠席者の人数を確認する もくひょう ・本日の学習内容と目標を確認する。	・1人で数えるとずれてしまう場合 は、数唱と名札カードを指すタイミン グが合うように、手を添えて速さを一 定にして数えやすくする。 ・「いまここ」の矢印を学習内容の横に 貼り、随時ずらしていく。 ・今日頑張ってほしい点をミニホワイト ボードに書いておき、提示する。		6－② 1－⑥
35分	【前半：集団学習】 ・チームでの学習に合わせて机や椅 子の位置を移動する。 どれだどれだ？ (T1チームの学習活動について記 載する。) ①今日使う絵カードの紹介を聞く。	・活動内容の難易度の違いと待ち時間 削減のため、児童A～F(T1担当) とG～I(T2担当)の2チームに分 かれて活動する。		5－④ 2－①
展 開	②活動の順番を決める。	・カードを見せながら、ゆっくり大き な声で発音する。		6－① 3－④ 2－④
	③好きなカードを1枚選ぶ。	・カードを裏向きにして絵が見えない 状態で選ぶことで、期待感を持って取 り組めるようにする。		6－③
	④絵カードを見て教員の質問に言葉 やジェスチャーで答える。	・「耳はどこ？」などと尋ね、自分の身 体の該当する部分を示すよう伝える。	B②	5－⑫
	⑤ひらがなカードの中から絵カード に合うひらがなを1文字ずつ選ん で並べ、読む。	・どの文字を選ぶか迷っているとき は、提示する文字数を減らしたり、小 さくひらがなが印刷されたヒント付き	A①	5－⑩

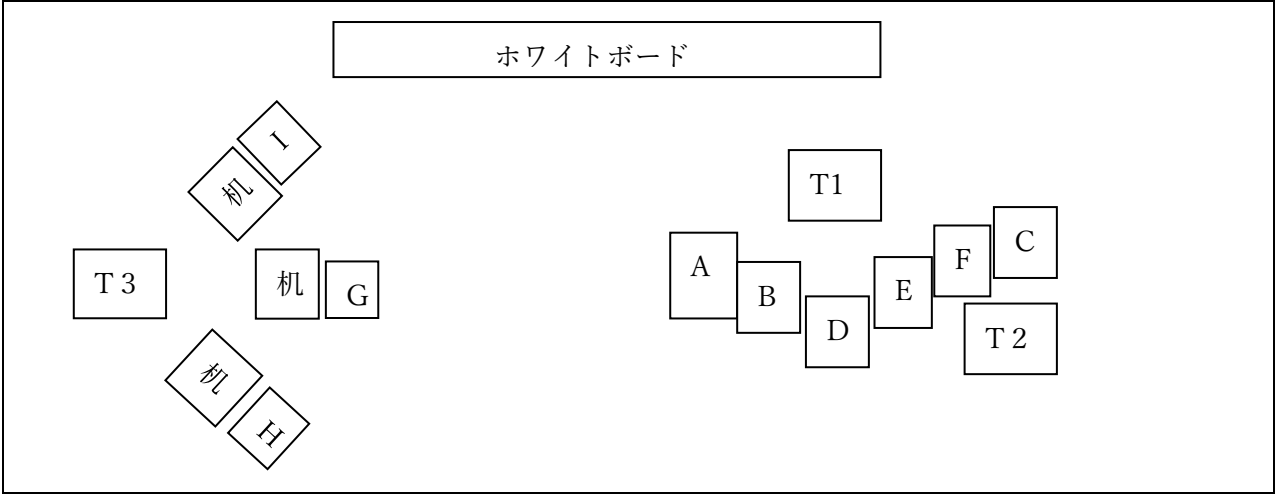
	⑥並べた文字と同じ文字で始まる言葉を考えたり、ひらがな表の中から似ている字を探したりして、気がついたことを発表する。 ※②～⑥を児童ごとに3～5問を目安に繰り返す ⑦正解数に応じてスタンプカードにスタンプを押す。 【後半：個別学習】 (T1チームの学習活動について記載する。) ブロックを置こう ①絵カードを見て、何であるか答える。 ②教員と一緒に正しい発音を意識してゆっくりと発音する。 ③1音ずつ発音しながら該当する文字数の分だけブロックを置く。 ④絵カードのひらがなを見ながらブロックをゆびさして発音する。 ※①～④を一人3～5問程度繰り返す。 ⑤正解した数だけカードにシールを貼る。	の絵カードを用いたりする。 ・同じ文字で始まる言葉が思い出しやすいように大きさや色や形などのヒントを出す。 ・ひらがな表の注目してほしい箇所に丸をつけるなどして、文字を見つけやすくする。 ・スタンプを押す箇所に印をつけて伝える。 児童の実態に応じて、 笠脇⇒児童A B D 中村⇒児童C E F 森岡⇒児童G H I の3チームに分かれて学習する。 ・はじめは2文字の単語から始め、徐々に文字数を増やしていく。 ・4音になると、間違いやすくなるので、1音ずつはっきりと発音し、真似して言うよう伝える。 ・正しく音を区切って発音できるようになってから、ブロックを操作するよう促す。 ・ブロックを置き間違えた時は、はじめからやり直し、一緒に発音しながら手を添えてブロック操作をする。 ・発音とゆびさしと同じ速さになるよう、一緒にゆびさしをして伝える。 ・文字数とブロックの数が同じであることに気づけるよう言葉がけをする。 ・カードに印をつけておき、自分で選んだシールを貼れるようにする。	C② B② A①	5－⑨ 6－① 5－⑩ 5－⑫ 5－⑨
--	--	---	-------------------------------	--

5分 ま と め	ふりかえり ・教員の話聞く。 終わりのあいさつ ・教員の号令であいさつをする。	・各教員から頑張っていた点や良かった点などを1人ずつ伝える。 ・姿勢を正し、教員と一緒にあいさつをするよう伝える。	1－⑥ 1－①
-------------------	--	--	--------------------

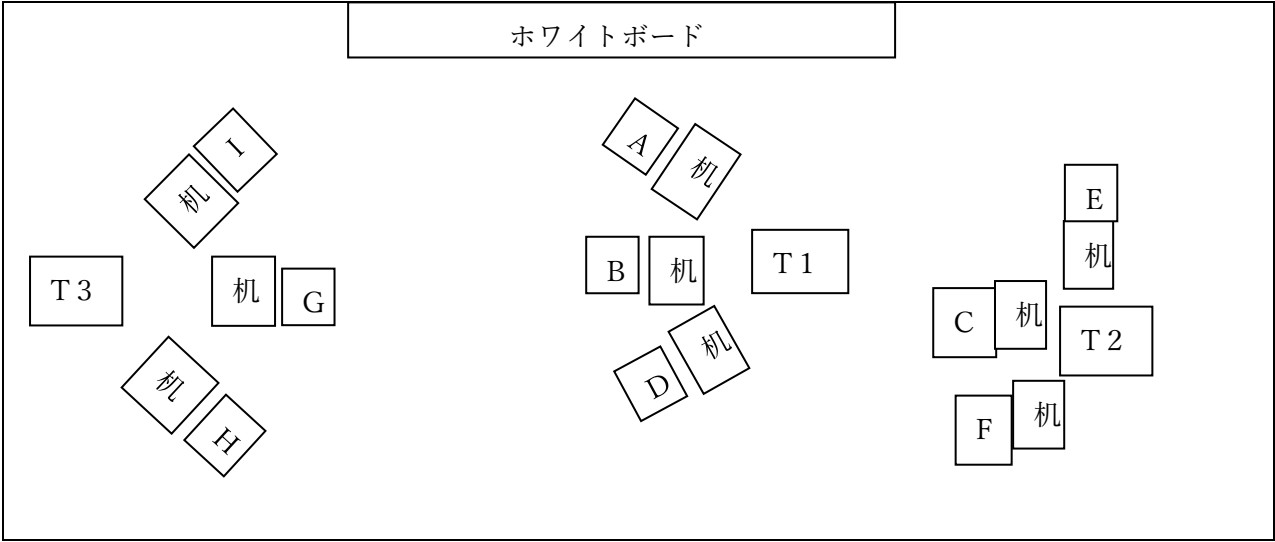
(6) 教室配置等（正面を上にして、児童生徒や教員の位置、教材・教具の配置等を示す）
導入時



集団学習時



個別学習時～終わりのあいさつまで



※使用教材

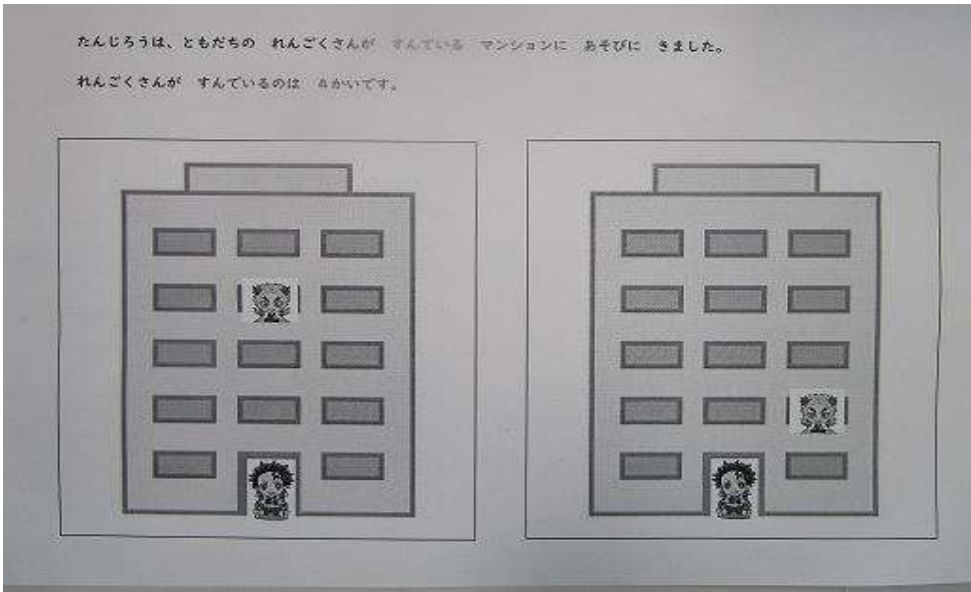
(1) どーれだどれだ（ひらがなカード）



(2) ブロックを置こう



(3) どーれだどれだ（文と絵）



小学部研究授業「国語」（グループ） 研究協議

●授業者：本校教諭 笠脇磨未

●助言者：本校首席 小西厚

聞き取り：研究研修部

◎ 授業者より

- ・挨拶の模倣の促しを大切にした。
- ・指導と評価の一体化をするために、授業の一つひとつの場面にも目標を持つことを意識した。
- ・活動の中で集団に入ることが難しい児童が参加できるようにすること、授業を進行していくことのバランスが難しかった。T1 と T2 の役割分担に悩んだ。
- ・文字指導はまだまだ時間はかかるが、社会に出たときに文字を知っていることを便利に思っている。普段の生活の中で遊びなどを通してやってみたいと思うことを授業に取り入れたい。「子どもの心を動かす。」授業作りをしたい。
- ・待ち時間の工夫や評価の仕方の工夫をしていきたい。
- ・友だちの声かけで授業に参加できる場面があった。友だちとの関わりを大切にしていきたい。

◎ 助言者からの感想や助言

- ・学習については目標立て→学習内容→評価の順番で考えることが大切である。評価することだけを重要視するのではなく、子どもがねらい通り、力がついているかなどの確認作業も大切にしたい。
- ・何のためにひらがなを学習するかという、学習の目標の前に目的をしっかりと持って授業ができていた。
- ・教師が目標を持っているだけでなくにグループの目標を提示し、子どもにも伝えていることがよかった。子ども自身が自分の目標を持って授業に参加することが大切。
- ・子どもが授業時間中ずっと目標を維持することは難しいので、ホワイトボードに書くなどして、視覚的に支援するとよい。目標を意識できる環境を整えることで、自己評価に結びつけられる。
- ・待ち時間のときなどの離席については、気になるものを減らすなどの環境整備、刺激のあるクッションを使用するなどの工夫をするとよい。
- ・友だちの誘いで課題ができた場面がとてもよかったので、参加できた本人と、誘ってくれた友だちの両方を評価し、スタンプを押すなどして、評価を視覚化するとよい。
- ・評価は教師からの評価と自己評価の二つが大切であるが、振り返りの場面があったことで、それができていた。自分がかんばったプリントなど、友だちに見てもらっていたことがよかった。
- ・指導案は、目的を持って目標設定しているということがぶれていなくてよかった。

「音楽科」学習指導案

大阪府立豊中支援学校

T 1	田口	有紀
T 2	加古	涼子
T 3	工藤	延恵
T 4	上戸	伸恵

1. 日時 令和3年12月14日（火） 第3時限（11:25～12:15）

2. 場所 第1音楽室

3. 学部・学年 中学部 第1学年（1グループ） 12名

4. 題材名 「曲を聞いて感じたことを色で表現しよう」（鑑賞・表現）

5. 題材目標

- ・曲名や曲想から自分が感じた色や考えがわかるようになる。（知・技）
- ・色を使って音楽表現を考えることや、曲や演奏のよさなどを見いだしながら、音や音楽を味わって色を選択できる。（思・判・表）
- ・進んで音や音楽に関わり、それぞれが選んだ色を尊重しながら、協働して音楽活動をする楽しさを感じると共に豊かな情操を培う。（学・人）

《特別支援学校 中学部 学習指導要領 音楽 1段階》

6. 生徒観

本校は知的障がい等のある生徒が在籍する支援学校である。中学部1年生は5クラスあり45名の生徒が在籍している。発達段階や状態に応じて、1グループから4グループの4つに分かれて課題別学習を行っている。この授業はS-M社会生活能力検査によると、社会生活年齢が5歳1カ月～9歳1カ月程度の生徒がいる1グループを対象としたものであり、12名が在籍し、主担者を含めた4名の指導者で授業を行っている。

2学期も終盤を迎え、授業態度は落ち着いてきてはいるものの、正義感から相手の気持ちよりも自分の気持ちを主張しすぎてしまい、輪が乱れたり、一人を執拗に攻め立てたりすることもある。また、楽しい授業の雰囲気優先しすぎると、気持ちが高まり、周りが見えなくなって騒いでもしまったり、その騒がしさで調子を崩したり、暴言や暴力が出たりしてしまう生徒もいる。中には集団が苦手な、その日の調子によっては、教室に入ることが難しく、別室でICT機器を活用したり課題のプリントをしたりして、授業を受ける時がある生徒もいる。

しかしその一方で、ほとんどの生徒は意欲的に授業に参加している。主担者の話をよく聞いて表現豊かに発言し、授業を受ける姿が見られる。集団活動に課題がある1グループではあるが、彼らの学習意欲を大切にしながら、授業を受ける集団として課題が解決できるよう、十分に配慮し授業を進めている。

7. 教材観

感じたことを色や形などで表し、「なぜ、その色を選んだのか」「なぜ、その形にしたのか」などを言葉にし、皆の前で発表する。各部（展開部・結尾部等）で曲調が変わる曲などではその部ごとに色や形、理由を考え、オリジナルの図形楽譜を作る。自分の感じたことと真摯に向き合い、皆の前で表現、発表し、自分の意見を傾聴されることで「周りから認めてもらえた」「受け入れてもらえている」という実感を得られる。それらは彼らの自信となり、自己肯定へと繋げることができる教材だと考える。

また、1つの音楽を聴いた時、感じ方は十人十色である。自分が感じたことだけが正解ではないこと、様々な人がいて、様々な感じ方があることを知ることができる。これは音楽に限らず、他人との違いは、必ず直面することであるため、今後生きていく上で一つのヒントになるのではないかと考える。

8. 指導観

自分の心に耳を傾け、自分の気持ちを表現する一つの方法として、曲を聴いて感じたことを色で表現するよう促していく。1人では表現が難しい生徒には、前に提示されている色画用紙の中から近いものを選ぶよう視覚的な支援をしたり、教員が気持ちに寄り添い、代弁しながら選んだりしていけるようにする。相手の意見を受け入れられるようになるための練習として、否定しないことを約束し、「傾聴」の方法を伝えることで、友だちの発表をうなずきながら聞いたり、拍手をして友だちの発表を応援、賞賛したりする気持ちを育てていく。1人で発表が難しい生徒は、教員や友だちが代弁し、傾聴される経験を積む。グループワークでは、それぞれが選んだ色について感想を述べあい、譲ったり主張したりしながら図形楽譜の作成を行う。自分の意見ばかりを主張しすぎている生徒にはそれに気付くように教員が助言し、主張が難しい生徒には教員が代わりに述べたりすることで促したりして、自分の気持ちへ折り合いをつけたり、主張していい場所で主張できたりする経験を積み上げられるようにしたい。

9. 題材の評価規準

① 評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
① 色紙の色についてどんな感情があるのかを知り記入する。	① 曲や曲想を感じながら、色や理由を考えたり選択したりして表現する。	① 友だちの発表を傾聴している。 ② 感じた色や表現を選んで図形楽譜を作成している。 ③ 曲から感じた色を出し合い、協働して音楽活動に取り組んでいる。

④ キャリア教育の観点

1コミュニケーション	2協調する力	3ルール理解・遵守力
① あいさつをすることができる ⑥ 話を聞き、理解できる	① 集団に参加できる ② 気持ち（意志）を表出することができる	① 人を傷つけない行動をする ⑪ 道具を正しく使うことができる
4健康管理力	5役割遂行力	6見通し、行動する力
⑥ 手指を清潔に保つことができる ⑪ 不調を訴えることができる ⑬ 自らクールダウンすることができる	⑤ 準備片づけができる ⑥ 安全に配慮して活動することができる ⑦ 物を扱う時の基本動作ができる	① 様々な情報から必要なものを得ることができる ② 自己選択・自己決定ができる

10. 題材の指導と評価の計画（全10時間、本時は第4時）

次	時	学習内容・学習内容	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
1	1	- 各感情についての物語を読み、感情に色があることを知る。 - 物語に出てきた感情や他にも考えられる感情を色ごとに書き出す。	- 物語「カラーモンスター」を読み聞かせる。T1 - 色画用紙を用意し、色にあった感情を書き込んでいく。T1 - 感情以外にも季節や天気等でも考えるよう促す。T1、T3、T4	A① C①
	2	- 曲を鑑賞する。 - 聴いて感じた色や理由を考える。 - 選んだ色と理由を発表する。	- 曲情報のみで感じたことを色や形に表現してみるように促す。 - 一人で考えることが難しい生徒は教員が助言し一緒に考える。 - 相手の意見を傾聴するように伝える。T1 - 発表者の選んだ色を前のホワイトボードに大きく示す。T1 - 発表する言葉を後ろの壁やモニターに提示しておく。T1	C① B①
	3			
2	4	- 曲名と作曲者、使われている楽器や曲想について知る。 - 曲想を知った上で各部ごとに鑑賞する。 - 各部ごとに曲を聴き、感じた色を選択する。	- 教科書を提示したり、モニターに作曲者や使われている楽器などを映し出したりして、興味が持てるようにする。T1 - 各部ごとに曲を止めて考える時間を設ける。T1 - 各部ではどんな色を感じるか理由も含め表現するように促す。 - 一人で考えることが難しい生徒は教員 T1,T3,T4が助言したり、選択肢があるワークシートから一緒に考えたりする。 - 発表者の選んだ色を前のホワイトボードに大きく示す。T1 - 発表する言葉を後ろの壁やモニターに提示しておく。T1	B① C② C①
	5			
	6			
	7	作成できた人の図形楽譜を発表し、音楽に色を当てはめて聴く。		

3	8	・各グループに分かれ、各部ごとに曲を聴き、感じた色を担当の箇所を決めてグループの図形楽譜を作成する。その際、記入する人、発表する人等を決める。	・各グループに1台ずつワークシートを配付する。T3、T4	C③ B①
	9		・各部ごとに曲を聴き、誰の選んだ色が良いか選んで作成するように促す。教員が各グループに1名ずつ入り、色や発表について助言する。T1、T3、T4	
	10		・グループで選んだ色を前のホワイトボードに大きく示す。T1	
	11	・各グループで作成した、図形楽譜の色や理由を発表し、音楽に色を当てはめて聴く。	・発表する言葉を後ろの壁やモニターに提示しておく。T1 ・各グループが作った図形楽譜をiMovieに当てはめる。T1	

1.1. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。
- ・感じた色で図形楽譜を作成する。

(2) 本時の評価規準

- ・感じた色をワークシートに貼ったり理由を書いたりして表現することができる。【B①】
- ・各部ごとに感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【C②】

(3) 本時で扱う教材・教具

おりがみ

画用紙

モニター

ワークシート

タブレット

(4) 生徒の実態と本時の目標

	生徒の実態	本時の目標	支援の手だて	評価規準
A	・複数のことを一度に処理するとパニックになることがある。選択肢を減らすことで選択できる。 ・気持ちが高揚すると不適切な発言が見られることがあるが、正すように指導することで適切な発言に変えることができる。	感じた色で図形楽譜を作成する。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・理由が数個書いてあるワークシートを使用する。	各部ごとに感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【C②】
B	・複数の選択肢から選択することができる。 ・積極的に発言できる。行動が行き過ぎてしまうこともあるが、周りと協調して関わるができる。		・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】

C	・周りの声や音が騒がしくなるとしんどくなるため、イヤーマフをして、不快な状況から回避しているが、それでもしんどくなる時は別室で授業を受けることもある。 ・人前での発言は苦手だが、感じたことがあると教員だけに伝えることはできる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
D	・複数の選択肢から選ぶことができる。 ・表現が豊かで積極的に発言することができる。 ・自分の気持ちが通らないと固まってしまうこともあるが、切り替えは早い。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
E	・苦手なことでも積極的に質問したり練習したりして取り組むことができる。 ・積極的に発言することができる。 ・周りとの協調性をもって活動することができる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
F	・「自由に」や複数の選択から選ぶことが苦手である。教員の助言や選択肢を減らすことで選ぶことができる。 ・周りとの協調して活動することができる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・選択の数をできるだけ少なくし、選択する言葉も正反対の意味が書かれたワークシートを使用する。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
G	・複数の選択肢から選ぶことができる。 ・リーダー的存在であり、皆に与える影響が大きい。 ・自信のあるものは積極的に発言することができる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・思う色が無い際は、他の色を探しに來られるようにし伝える。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
H	・人が苦手、人前での発表が苦手であるが、その中でもやるべきことをやろうとする意識が芽生えてきている。インスピレーションが湧いて当てはまる色があれば自信を持って取り組むことができる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記したものをホワイトボードに示す。 ・思う色が無い際は、他の色を探しに來られるようにし伝える。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】

I	・積極的に発言することができる。複数ある選択肢の中から選択することができる。 ・正義感が強く、気持ちが止められず、トラブルになることがあるが、クールダウンして気持ちを抑えようとする姿が見られるようになってきている。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・思う色が無い際は、他の色を探しに来られるようにし伝える。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
J	・新しいことや自分ができない、苦手と思っていることに取り組むまでに時間がかかる。選択肢を減らし、教員が助言することで選択することができる。 ・曲から色を連想することに意欲的に取り組み、独自の表現ができる。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・選択の数をできるだけ少なくし、選択する言葉も正反対の意味を持つものにする。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
K	・積極的に授業に参加することができる。 ・複数の選択肢から選択することができる。 ・気持ちが高揚すると手足、口が止まらなくなったり、友だちにちょっかいを出したりしてトラブルになることがある。	曲を聴いて感じた色や理由を表現することができる。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・思う色が無い際は、他の色を探しに来られるようにし伝える。	感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【B①】
L	・音に過敏な面がある。授業への経験が少なかったり、精神的に不安定な面があることから授業へは参加できないこともある。また、他者から見られることが苦手で教員が1名付き、本人のペースに寄り添いながら別室で取り組んでいる。 ・理解力は高く、友だちが困っていると、助けることができる。	感じた色で図形楽譜を作成する。	・色画用紙に感情等を記入したものをホワイトボードに示す。 ・音楽室に入れないときは課題のワークシートを渡し、別室でICT 機器を音楽室と別室に設置し、音楽室の様子を見聞きしながら T2 と一緒に取り組めるようにする。 ・思う色が無い際は、他の色を探しに来るよう伝える。	各部位ごとに感じた色や理由を選び、図形楽譜を作成する。【C②】

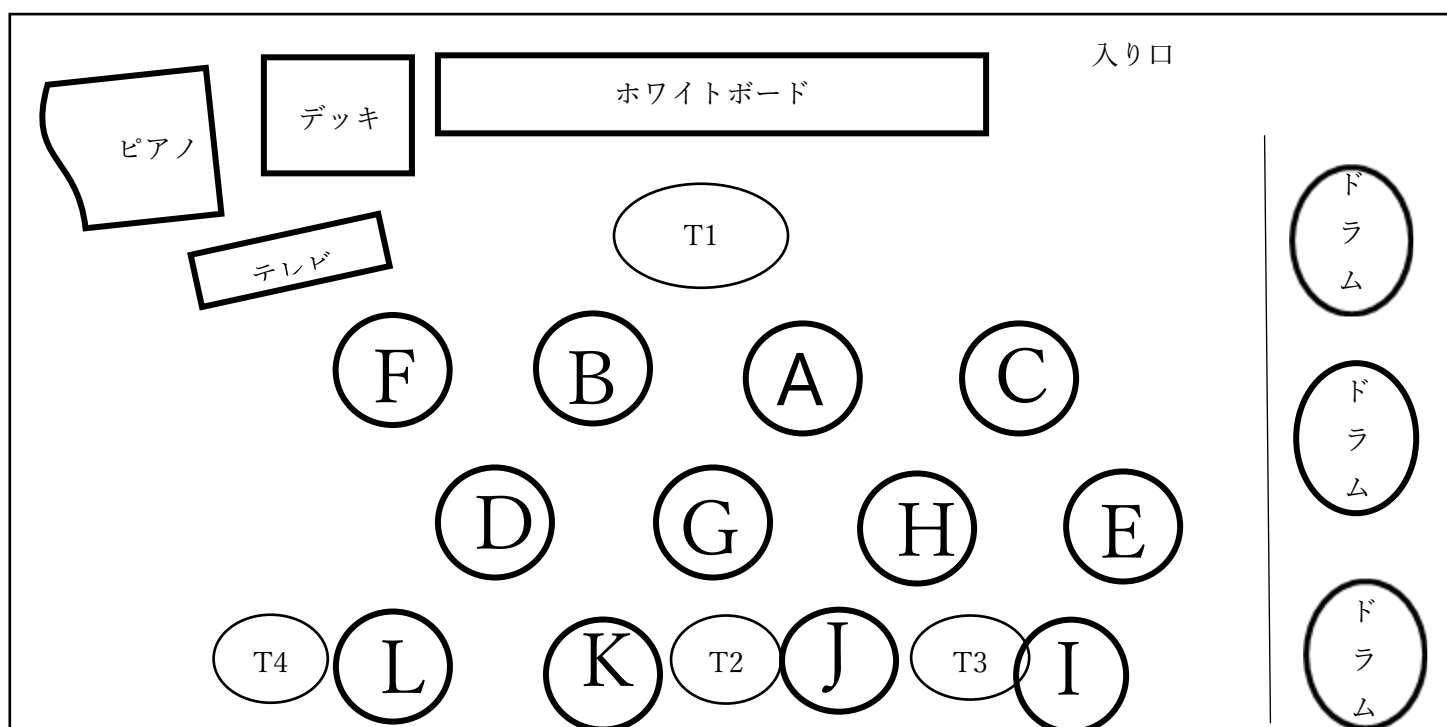
V 教職員の授業研究

(5) 本時の学習過程

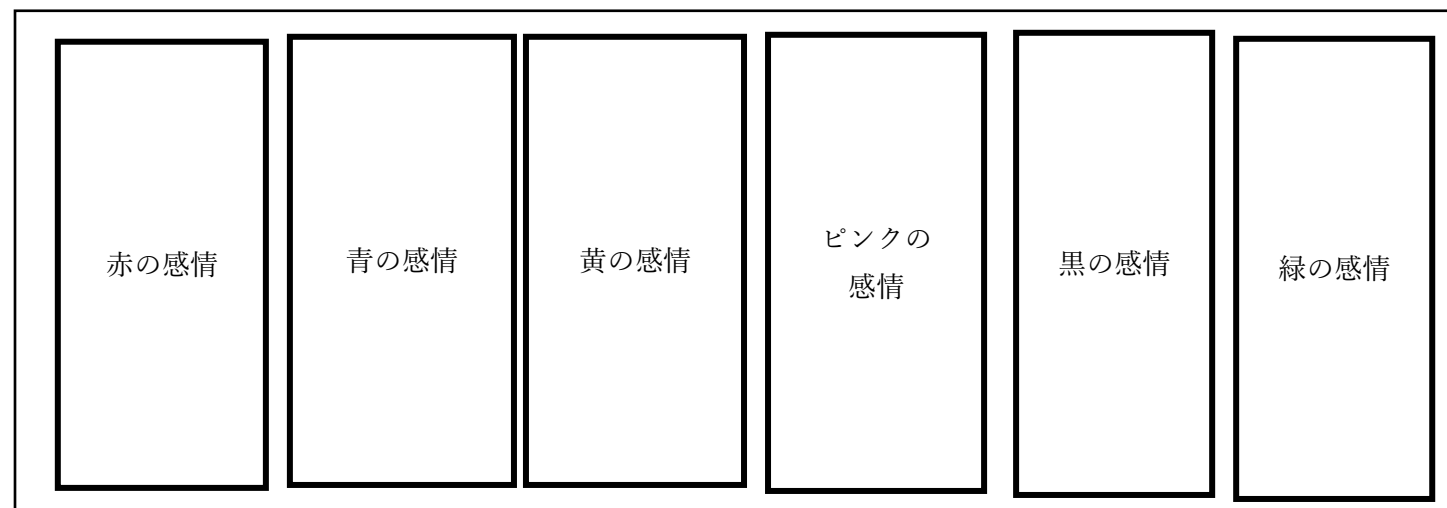
[illegible]

10分	・振り返り	・良かった点を伝えたり、目指す姿を伝えたりする。T1		1⑥
まとめ	・次回の説明を聞く。 ・あいさつ ・椅子を片付けて、荷物を持って廊下に整列する。 ・並んで教室に戻る。	・次回の予告をする。T1 ・静かに「起立」「礼」をし、「礼」をした後に動き出すよう促す。T1,T3,T4 ・あいさつの後、椅子を片付けるよう促す。T1 ・椅子を片付けた人から廊下に整列するよう言葉かけをし、T3,T4の指示に従い教室に帰るように伝える。T1		1①

(6)教室配置等(正面を上にして、生徒や教員の位置、教材の配置等を示す)



(7)板書計画(順不同)



中学部研究授業「音楽科」 研究協議

●授業者：本校教諭 田口有紀

●助言者：本校首席 上戸伸恵

聞き取り：研究研修部

◎ 授業者より

- ・「自分を大切にできる人」「相手を大切にできる人」になってほしいと思って生徒に接している。
- ・授業では、2つのルールを設けていて、1つ目は「自分の感じたことを色で表現して、言葉で理由をつけること」で、自分の気持ちや心に向き合う練習になり、音楽の授業外でも自分と向き合うことを習慣化してほしいと考えた。2つ目は「相手の感じたことが自分の感じたことと違って否定しないこと」で、相手の気持ちを大事にできると、それがまた自分に返ってきて大切にしてもらえると考えるからである。
- ・中1の段階ではまだ早いと考えるかもしれないが、将来的に社会に出て就労をめざしていく人がいる。社会に出て人間関係で躓くことが多く、「コミュニケーション力」が求められることが多いが、支援学校に通っている生徒には高いコミュニケーション力をつけるのは難しい生徒もいる。「一緒にいて心地よい人」「周りから愛される人」になると支援が必要な時に手を差し伸べてくれる人が出てくれるのではないかと思う。また、自分の得手、不得手を認め、相手を尊重し、苦手なことがあっても「全部含めてこれが私」と認め、自己肯定感を高めて胸を張って社会に出て行ってほしい。
- ・性教育に関心があり、グローバルな性教育をめざしている。「性」とは「心が生きる」と書き、教育は心が生きていなくてはならないし、心が生きる教育は人を育てると考える。性教育が習慣化、常態化するためには日々の授業に性教育の観点を取り入れるのが有効であると考え、今回の鑑賞の課題を行った。

◎ 助言者からの感想や助言

- ・授業前にルールの確認をする、着席時のメリハリ、主担者の目的が明確である、指導案にある目標が達成されている、教科書が活用されているなど良い点があった。ICT 機器を使って別室の生徒も同じ授業を受けられていることも良かった。
- ・サブの教員として、プランナーのねらい、教材、生徒への働きかけをくみ取って対応するように心がけている。
- ・「人間性を育む音楽がしたい」という主担者の考えから、明確なめざす生徒像があり、それが本校の掲げているグラウンドデザインや卒業生像にリンクしている。めざす卒業生像に向けて授業展開がなされていた。
- ・指導計画を書く時には、評価に何を書きたいか、生徒たちにどう変容してほしいのか、目標設定の段階からイメージして手立てや目標を考えてほしい。

「数学科」学習指導案

府立豊中支援学校

T 1 大西 弘朗

1. 日時 令和3年9月30日(木) 第4時限(13:25～14:15)

2. 場所 第3学年 2組教室

3. 学部・学年・組 高等部 第3学年 Aグループ 9名

4. 単元名 割合

5. 単元目標

- ・値段に合わせて付与されるポイントがいくらになるか計算することができる。(知・技)
- ・買った品物の合計を計算し、数字で表すことができる。(思・判・表)
- ・買い物をするときにお得に買い物をしようとする態度を養う。(学・人)

〈特別支援学校 高等部学習指導要領 数学 2段階〉

6. 生徒観

本校は、知的障がい等のある生徒が在籍する支援学校である。本校の高等部3年の授業は、生徒の発達段階、習熟度や対人関係、個人のニーズ等を考慮して4つのグループに分かれている。本グループは「Aグループ」の生徒9名で構成されており、卒業後の就労を見据えている生徒たちのグループである。

数学の習熟度においては文字式の計算ができる生徒もいれば、割り算が難しい生徒もいるが、掛け算九九は全員解くことができ、計算機を使用することもできる。授業では、自分の意見を人に伝えるのが難しい生徒や自分で考えることを苦手とする生徒がいる一方で、積極的に自分の考えを発表できる生徒もいるなど差がある。自分で考えることを苦手とする生徒には、選択できるようにしたり、例を示してヒントとなるような言葉かけを行ったりしながら授業を進めている。

7. 教材観

社会に出たときよく出会う計算は何であろうと考えたとき、今回の割合の単元にたどり着いた。従来の割合の単元では「歩合、百分率の理解」、「割合の文章を式にする」、「割引の文章題を解く」が主な内容だったが、近年「〇割引」ということより「〇割分ポイント付与」という表記をよく目にすると感じた。「〇割引」と表記されている場合、一緒に金額も提示されていて実際あまり計算することがないが、「〇割分ポイント付与」と表記されている場合買うまでわからなかったりして事前に計算をしておくことで、どこで買うことが得になるかを考えることができる。本校ではキャリア教育に取り組んでおりこの単元が社会的自立に向け、必要な基盤となる能力の一つであると考え、これから社会に出たときに必要なのは割引の計算よりもポイントの付与の計算の方ではないかと考えるので、この単元を通して将来、買い物をするときにお得になる方法があり、それを買う前に計算し、どうすれば最善であるかの判断材料にしていけるようになってほしい。

8. 指導観

百分率、歩合を小数に変換するまた、小数を百分率、歩合に変換することがこの単元の初歩であり重要な点と考えるので、ゆっくりと確実に定着するよう演習を重ねる。四則計算、小数・分数の計算も大事ではあるがその計算でつまずいたり間違えたりして、できない等の苦手意識を持たれてしまうことも考えられるので、計算の苦手な生徒には計算機を用いて計算するように支援する。また、キャリア教育の一環として実際にあったポイント付与キャンペーンをもとに出題をする。そうすることで今回の単元がより身近に、より必要性のある技能だと理解し、興味をもてるようにしたい。文章題において計算を解くことと同様に文章から式を立てることも重要でそれは、生活において計算式を見て解くことよりも、話の中や文章から式を考え解くことがほとんどであるからである。生徒に出題し、その解答が計算で間違っていたのかまた、立式の段階で間違っていたのかを見極め、的確な指導が必要である。

9. 単元の評価規準

①評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
① 百分率、歩合を小数に表すことができる。 ② 割合の計算方法を身につけている。	① 問題に取り組み、その考えた答えを発表することができる。 ② 売値に対していくらの割引、ポイント付与があるか考えることができる。	① 割合の計算を積極的に取り組んでいる。

②キャリア教育の観点

1 コミュニケーション	2 協調する力	3 ルール理解・遵守力
③自分の意見を伝えることができる。	①集団に参加できる。	⑩買い物をすることができる。 ⑪道具を正しく使うことができる。
4 健康管理力	5 役割遂行力	6 見通し、行動する力
⑧感染を予防することができる。	⑪役割遂行することができないときに、助けを求めることができる。	①様々な情報から必要なものを得ることができる。

10. 単元の指導と評価の計画（全6時間、本時は第4時）

次	時	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準
1	1 ・ 2 ・ 3	・割合の計算演習 ・ポイント付与の仕組み ・ポイント付与の計算 ・割引の計算	・百分率、歩合について日常生活でび例を挙げて説明する。 ・ポイントが付与されるということが次の買い物に使えることを説明する。	・A①、A② ・C① ・B①
2	④ ・ 5 ・ 6	・割引、ポイント付与の割合の計算文章題	・割合の立式に時間をかけるため、状況によって計算機を用いて計算するよう促す。	・A② ・B①、B② ・C①

11. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・いくらのポイントが付与されるか求めることができる。
- ・文章から式を立てることができる。

(2) 本時の評価規準

- ・机間巡視のときに答えが正解している。または、答えの発表をするときに正解している。【B②】
- ・計算式を立てることができる。【A②】

(3) 本時で扱う教材・教具

計算機

モニター

(4) 生徒の実態と本時の目標

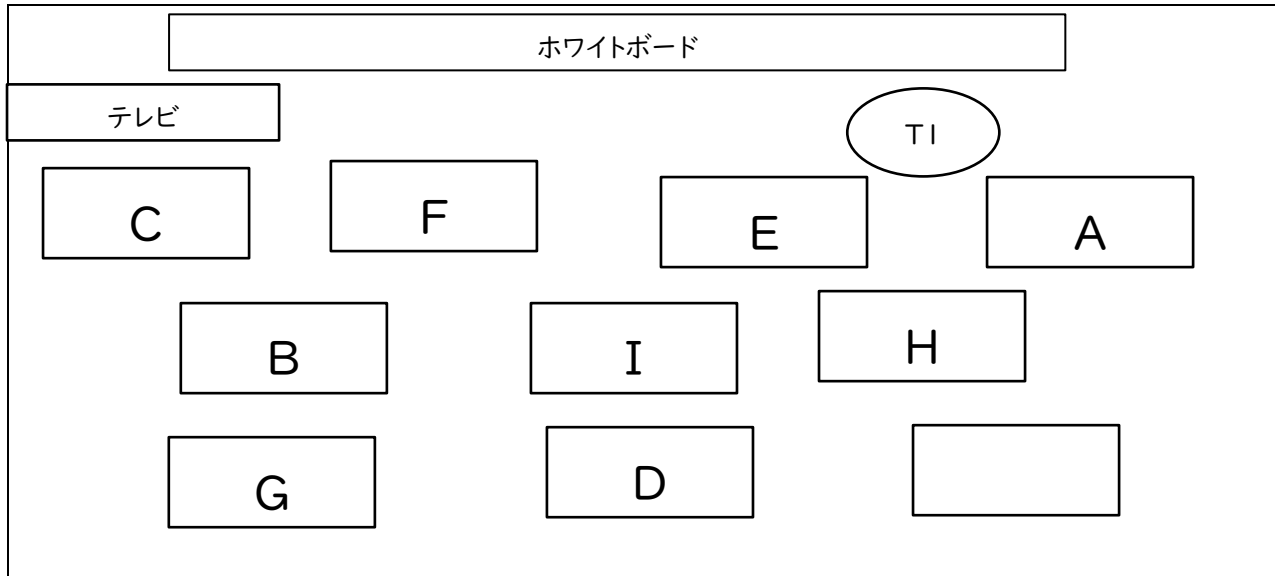
	生徒の実態	本時の目標	支援の手だて	評価規準
A	・四則計算ができる。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。	・文章を読んで立式ができる。	立式に行き詰っていたら、ヒントを示す。	計算式を立てることができる。【A②】

B	・四則計算ができる。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。	・文章を読んで立式ができる。	立式に行き詰っていたら、ヒントを示す。	計算式を立てることができる。【A②】
C	・四則計算ができる。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。 ・間違えたくない気持ちが強く自分の考えを伝えにくいときがある。	・立式した問題を一間以上解くことができる。	計算が間違えていたり、行き詰っていたら計算機を使用するよう促す。	答えがいくらになったかの質問に対して正しい答えを発表することができる。【B②】
D	・四則計算ができる。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。	・文章を読んで立式ができる。	立式に行き詰っていたら、ヒントを示す。	計算式を立てることができる。【A②】
E	・四則計算できる。 ・小数の計算が苦手。 ・計算機の使用ができる。	・立式した問題を解くことができる。	計算が間違えていたり、行き詰っていたら計算機を使用するよう促す。	答えがいくらになったかの質問に対して正しい答えを発表することができる。【B②】
F	・除法の計算が苦手。 ・小数の計算が苦手。 ・計算機の使用ができる。	・立式した問題を解くことができる。	計算が間違えていたり、行き詰っていたら計算機を使用するよう促す。	答えがいくらになったかの質問に対して正しい答えを発表することができる。【B②】
G	・除法の計算が苦手。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。	・立式した問題を解くことができる。	計算が間違えていたり、行き詰っていたら計算機を使用するよう促す。	答えがいくらになったかの質問に対して正しい答えを発表することができる。【B②】
H	・四則計算ができる。 ・小数の計算ができる。 ・計算機の使用ができる。 ・問いかげや次の指示は全体指示では動きにくい。	・立式した問題を解くことができる。	計算が間違えていたり、行き詰っていたら計算機を使用するよう促す。	答えがいくらになったかの質問に対して正しい答えを発表することができる。【B②】
I	・四則計算できる。 ・小数の計算できる。 ・計算機の使用ができる。	・文章を読んで立式ができる。	立式に行き詰っていたら、ヒントを示す。	計算式を立てることができる。【A②】

(5) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び 支援の手だて等	評価規準	キャリア アの観 点
3分 導 入	○あいさつ ・教員の号令に合わせ、全員で語先後礼を意識しながら挨拶をする。 ○出欠確認 ・欠席者の名前を報告する。	・全員が椅子を入れ、起立したことを確認した後、挨拶の号令をかける。 ・報告を受ける際には、生徒の様子を確認する。		
42分 展 開	○前回の復習 文章から式の立て方を振り返る。 ○文章問題 ・実際にあったポイント付与のシステムの説明を聞く。 ・それを元にもし自分が買い物したらいくらのポイントが付くか計算する。 ・質問に対して答える。 ・解説を聞く ・どの順番で買い物をすればたくさんポイントが付くか考える。 ・質問に対して答える。 ・解説を聞く。	例題を出題し、どういった式になるか発問を行う。一人一問出題する。 ・モニターでそのシステムの概要を映す。 ・机間巡視を行い、解き悩んでいたらヒントを示す。 ・解説で問題を解くとき、机間巡視でヒントを示し理解できた生徒に正解の発表を促す。正解を発表できたことで、できたと自信を持てるようにする。	【A②】 行動の観察 行動の観察 【B②】	1-③ 3-⑩ 5-⑪ 1-③
5分 ま と め	○ふりかえり ・文章から式を立てる方法のふりかえりを聞く。 ・問題にしたシステムのふりかえりを聞く。 ○あいさつ ・教員の号令に合わせ、全員で語先後礼を意識しながら挨拶をする。	・「1000 (の) 円30%は」という問題の (の) は (×かける) にする。と伝える。 ・再度モニターでそのシステムの概要を映す。 ・本時のねらいを再度確認し、次回の授業の予告を行う。 ・全員が椅子を入れ、起立したことを確認した後、挨拶の号令をかける。		

(6) 教室配置等（正面を上にして、生徒や教員の位置、教材・教具の配置等を示す）



(7) 板書計画

- 復習 ① 1000円の30%引きは
 $1000 \times (1 - 0.3) = 700$ 円
- ② 2000円の40%引きは
 $2000 \times (1 - 0.4) = 1200$ 円
- ③ 1500円の20%引きは
 $1500 \times (1 - 0.2) = 1200$ 円
- ④ 2200円の15%ポイント還元
 $2200 \times 0.15 = 330$ ポイント
- ⑤ 3600円の25%ポイント還元
 $3600 \times 0.25 = 900$ ポイント
- ⑥ 4200円の5%ポイント還元
 $4200 \times 0.05 = 210$ ポイント
- ⑦ 3000円の2割引き
 $3000 \times (1 - 0.2) = 2400$ 円
- ⑧ 6300円の3割ポイント還元
 $6300 \times 0.3 = 1890$ ポイント

問題(1)それぞれいくらのポイントが付与されますか？また、合計ポイントはいくらか。

- | | | |
|--------|---------|---|
| ① ベッド | 53000円 | |
| ② テレビ | 97000円 | $97000 \times 0,03 = 2910$ ポイント |
| ③ 洗濯機 | 150000円 | $150000 \times 0,06 = 9000$ ポイント |
| ④ 冷蔵庫 | 199000円 | $199000 \times 0,09 = 17910$ ポイント |
| ⑤ エアコン | 177000円 | $177000 \times 0,12 = 21240$ ポイント |
| ⑥ PS5 | 49000円 | $49000 \times 0,15 = 7350$ ポイント |
| | | $2910 + 9000 + 17910 + 21240 + 7350 = 58410$ ポイント |

問題(2)ポイント付与が多くなる順番に並び替えなさい。また、その時のポイントはいくらか。

- 6
- | | |
|--|------------------------------|
| 1 | $53000 \times 0,03 = 1590$ |
| 2 | $97000 \times 0,06 = 5820$ |
| 3 | $150000 \times 0,09 = 13500$ |
| 5 | $177000 \times 0,12 = 21240$ |
| 4 | $199000 \times 0,15 = 29850$ |
| $1590 + 5820 + 13500 + 21240 + 29850 = 72000$ ポイント | |

高等部研究授業「数学科」 研究協議

●授業者：本校教諭 大西弘朗

●助言者：本校指導教諭 藤木奈緒子

聞き取り：研究研修部

◎ 授業者より

- ・生徒からポイントの付与について知りたいという発言があり、フリマアプリのクーポンを教材として取り上げた。
- ・生徒が興味を持ち、イメージが浮かびやすいよう、文章題の設定は生徒が知っている人の名前を使用する。ただし、生徒の名前は使用しないようにしている。
- ・説明が続く場合は、答えられる部分を質問し、生徒が集中して聞いているかを確認している。
- ・解説は板書のみで終わることもできるが、あえて生徒に発言できる場を設けながら解説を行う。机間巡視をしながら生徒が理解していることを把握したうえで、答えられる部分を質問する。苦手な生徒でも「できる」という自信を持ってほしいという思いもあり、生徒が発言する機会を設定して解説を行うようにしている。
- ・数学が得意な生徒には難しい問題、苦手な生徒に対しては式または計算のみの問題を提示することができ、幅広く指導できる単元である。
- ・板書の「0」の数が増えると、生徒が数えにくいということに気づき、数字から漢数字に書き換えた。
- ・ポイントをたくさん手に入れるためには価格の安いゲーム機を買えばよいが、生徒には実生活と結び付けて考える習慣をつけてほしい。生活を始める際に必要な生活家電や家具を購入するほうがよいと考えられるようになってほしい。

◎ 助言者からのインタビュー

Q1 数学を通して生徒たちに何を身につけてほしいか

A1 考える力を身につけてほしい。3年間を見通して、授業の計画を立てている。1年は計算といった基礎の分野、2年では速さや図形の少し難しい分野、3年は卒業後に向けて実用的な分野を扱うようにしている。

Q2 高3の「就労を目標とするグループ」に対するキャリア教育の考えは？

A2 すぐに社会に出る生徒に対して、実生活で使用する時間やお金について取り上げるようにしている。

Q3 このグループに対して授業の雰囲気作りで大切にしていることは？

A3 数学は苦手な生徒が多いため、話を聞こうと思えるような教員でいようと心掛けている。生徒の日ごろの様子から何に対して笑い、興味を持っているのかを把握するようにしている。

豊中支援学校 キャリア教育 6 観点とその内容項目 (R 元年 9 月 6 日確定版)

	項目	小項目	内 容
1	コミュニケーション力 (人間関係・社会関係調整力) 略号は【コ-○】	発信	①あいさつをすることができる
			②自分の要求・意思を伝えることができる。
		受信	③自分の意見を伝えることができる。
			④報告、連絡ができる。
		関わり	⑤呼名に応じることができる
			⑥話を聞き、理解できる。
2	協調する力 (人間関係・社会関係調整力) 略号は【協-○】	集団	⑦身近な大人に関わることができる。
			⑧友だちと関わるることができる。
		自己	①集団に参加できる。
			②協力できる。
		対人	③気持ち(意思)を表出することができる。
			④我慢できる(耐性)
3	ルール理解・遵守力 (人間関係・社会関係調整力) 略号は【ル-○】	社会の ルール	⑤他者の要求に適切に応じたり、拒否したりすることができる
			①人を傷つけない行動をする。
		公共の場面	②法律を遵守する。
			③丁寧な言葉を使うことができる。
			④順番を守ることができる。
			⑤場面に合わせたマナーを身につけることができる。
			⑥その場に適した服装をすることができる。(TPO)
			⑦場に応じて身だしなみを整えることができる。
		日常生活	⑧電車・バス等を利用することができる。
			⑨時間を守ることができる。
			⑩買い物をすることができる。
4	健康管理力 (自己理解・自己管理能力) 略号は【健-○】	食事	⑪道具を正しく使うことができる。
			①食事量、食べる速さを調節することができる。
		更衣	②偏食を改善することができる。
			③衣類の調節ができる。
		排泄	④定期的に排泄を行うことができる。
			⑤排泄の処理を行うことができる。
		清潔	⑥手指を清潔に保つことができる。
			⑦口腔の清潔を保つことができる。
		生活リズム	⑧感染を予防することができる。
			⑨起床、就寝時刻を自己管理できる。
		運動	⑩運動習慣を身につけることができる。
不調への 対応	⑪不調を訴えることができる。		
	⑫手当てができる。		
余暇の活用	⑬自らクールダウンすることができる。		
	⑭充実した余暇を過ごすことができる。		
5	役割遂行力 (課題対応能力) 略号は【役-○】	認識・理解	⑮服薬の管理ができる。
			①学年、クラス、グループ等に属していることを意識できる。
		遂行	②実習先や異なる年齢間での立場を理解できる。
			③係り、当番、代表等の仕事を遂行できる。
			④準備、後片付けができる。
			⑤安全に配慮して活動をするすることができる。
			⑥急な役割変更に対応し、遂行することができる。
			⑦物を扱うときの基本動作ができる。
		評価	⑧目的地まで移動することができる。
			⑨評価を受け入れて、実行力を高めることができる。
		発展・改善	⑩適正に自己評価することができる。
⑪役割遂行することができないときに、助けを求めることができる。			
⑫作業のミスに気づき修正することができる。			
6	見通し、行動する力 (キャリアプランニング能力) 略号は【見-○】	目標設定 力	⑬様々な情報から必要なものを得ることができる。
			①見通しを立てて行動することができる。
			②自己選択・自己決定することができる。
			③自分の長所・短所、得意・不得意を知る(自己理解)ことができる。
		将来を描く力	④自分の長所・短所、得意・不得意を知る(自己理解)ことができる。
			⑤見学や実習をとおして、卒業後の進路(生活)を考えることができる。
指導計画等に示すときの略号は、例えば【1コミュニケーションの③】の場合は最初の一字を取って 【コ-③】とする			

あとがき

新型コロナウイルス感染症による生活様式の変化に伴い、学校現場での教育にも大きく変容が求められています。児童生徒との距離感の近い特別支援教育においては、特に慎重に教育を進めていかなければなりません。その点を念頭に置いて、教育に取り組んでまいりました。

さて、本年度の研究・実践についてまとめた研究紀要を無事に上梓することができました。多くの方に、授業づくりの一助にいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、研究にあたり、ご指導ご助言いただきました先生方に、心より感謝をいたしますとともに、厚くお礼申し上げます。

教頭 内田 紘允

